川柳の雑誌

麻生路郎★主宰

號月四

Pensoj flugas trans la land-limon

會社合併竝
社名變更に付

謹告

謹啓　每々格別ノ御引立ヲ蒙リ難有奉深謝候　陳者大阪電氣軌道株式會社ハ三月十五日ヲ以テ參宮急行電鐵株式會社ヲ合併シ同時ニ社名ヲ左記ノ通變更仕候間御高承被成下度　尚今後共倍舊ノ御愛顧賜度此段御願旁御挨拶申上候

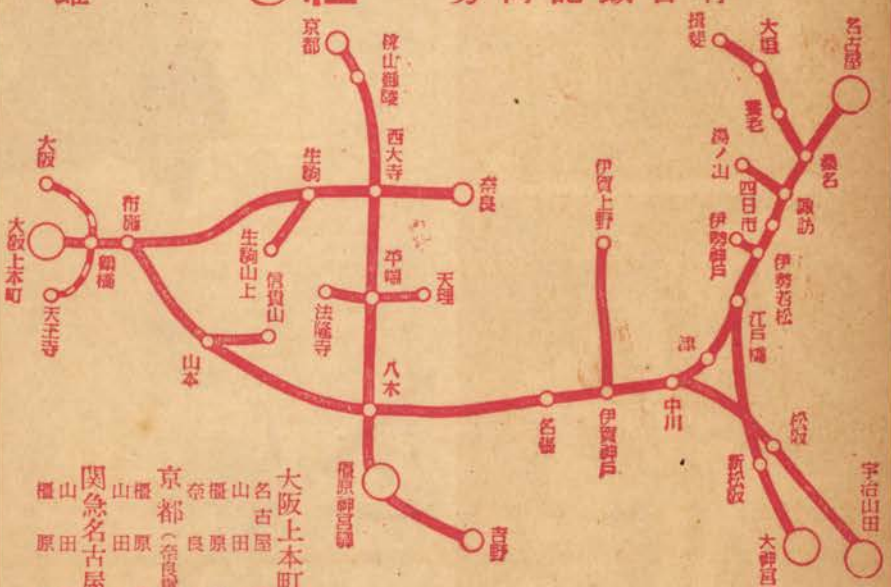
敬具

關西急行鐵道株式會社

（舊社名　大阪電氣軌道株式會社）

昭和十六年三月

關西急行鐵道株式會社
社長　種田虎雄



大阪上本町より
名古屋　急行　三十分毎
山田　〃　三十分毎
橿原　〃　十五分毎
奈良　〃　十分毎
京都（奈良驛より）
橿原　急行　三十分毎
山田　〃　三十分毎
關急名古屋より
山田　急行　三十分毎
橿原　〃　三十分毎

鐵道線省線指定驛上り
伊勢大神宮・橿原神宮
參拜乘車券發賣
（省社共通）

含有滋味が
もたらす
元氣

ルービヒサア

愛飲家に
確認さる

大日本麦酒株式會社

＝苦笑と哄笑で人生勉強＝

麻生路郎著

新川柳評釋

★どのページから讀んでもよい。面白いから引づられ讀む。讀み了つたら、川柳の味が判るといふ本である。

★定價八十錢（送料）六錢
★海外註文は送料實費加算を乞ふ

川・雜・句・箋

★一冊　拾五錢
送費　三錢

藤村誠一氏著

隨想集

詩人複眼

★高鷲亞鈍が著者のペンネームだと云へば本誌讀者にはこの本が持つ魅力を想豫することが出來やう。

序　麻生路郎
百田宗治

販　吉川刊比古
裝幀　田村孝之介

定價壹圓（送費六錢）

堺市出島海岸通二丁一八二番地
發行所　不朽洞
振替大阪三〇三九二番

路郎居雜感

（四）

人間の世界に矛盾はつきものだが、近ごろのやうに矛盾が表面に浮かび上つて來た時代は稀れである。——石が流れて木の葉が沈むといふ俗諺が思ひ出される。

（五）

學童を持つた親たちは、みなそれぞれに、入學試驗——それも小學校の內申と口答試問と體力檢査に依る入學に人知れず心をいためられたことゝ思ふ。私の三男も今年は農學校の入試をうけたが、物の美事に落ちてしまつた。しよげるかと思うと案外平氣である。それでよいのだ私は思つてゐる。

世の常の親たちは、あらん限りのツテを求めて、裏からの應援を怠らなかつたそうであるが、私の家では一切それをやらなかつた。何んとかして入れてやりたいといふ親ごころは是認出來ないこともないが、そのために神聖であるべき教員の心を濁らせたくない。入學出來たよろこびもさることながら、次ぎに來たるものは、その學校の先生の心の汚れが問題とならないものであらうか。彼が農學校笑ひ合つたが、それは戰爭の時に軍人にしておけばよかつたと思うのと同じで、まことに愚なことである。

三男は小さい時から無口でガン張り屋で家ではムッソリニと綽名されてゐた。彼が農學校を志したのは小學の五年の頃だつたと思ふ植物に不思議な眼を輝やかし、昆虫に興味を持ち、學校から歸へると、横の庭地へ出て日がとつぷりと暮れるまで一人の友もなく、そこで暮らしてゐた。

彼は好んで科學雜誌を讀んだ。植物書はいふまでもなく、肥料に關する本まで求めてゐた。新聞や雜誌から藥草其他のスクラップをあり、お百姓さんであつた。これで農學校へ這入れゝば彼の小さな希望は達成せられて、平凡なお百姓さんになれたかも知れない。小學校の成績は優等だつたので、體力檢査さへ無事に通れたら這入れるでせうとのことだつた。第一日の口答試問は無事だつたらしい。體力檢査で、五十人宛一度に走らされた時彼一人が二三間遲れてゴールインしたさうだ。先生が、「お前は何處か惡るいのか」と聞かれたそうだが、彼は「イ、エ」と簡單に答へた。十日ほど風邪で寢てゐたのを試驗に起きて行つたので急に皆と同じ歩調が出なかつたらしい。無口な彼はその說明はしなかつた。それで落ちたのかどうかは知らないが、彼の理想とした農學校への入學は美事に失敗してしまつた。

試驗にすべつても、彼は彼の小さな畑に出ることを忘れない。うらゝかな春の日をまともにうけて、土壤の篩分けに懸命になつてゐる。

私は二階の窓から、それを眺めて、一寸可哀想な氣もしたが、それでいゝのだとも思つた。

不朽洞句抄

麻生路郎

腕時計米食時間中を指し

法律は兎ら角といふ動きやう

縄張りの外で議員の日向ぼこ

おツさんも翼贊かいと風呂で會ひ

英語排撃を笑ふ

スキッチをどういひませう新世帶

妻吉自殺傳を讀む

おかたさんを思ひ妻吉さんをおもひ

へ這入ることがいゝのか、落ちた方がいゝのかは私達にはわからない。「一人位お百姓さんが出來てもいゝね」と云つて食卓で家族がはじめた。リトマス試驗紙を購めて土壤の檢査をした。ショベルを買つたり。噴霧器や篩まで買つた。彼は家での小さな博物學者で

川柳雜誌 四月號目次

表紙……（白樺）……福井哲

路郎居雜感……麻生路郎…（一）

志賀高原……蛭子省二…（二六）

月評 川柳一ト筋 路郎・丹路・某人・鋭々・白柳子・亞鈍…（二〇）

碁・熊・にしん……福田山雨樓…（二三）

武玉川四篇研究（七）……梅本塵山・森蛭子・東魚…（一〇）

ドクトル・ツアヘルトと語る……阿部佐保蘭…（二四）

奥村丹路論……高鷲亞鈍…（二）

街に住めば……高橋かほる…（二六）

理…（補追）……前田五健…（二七）

冷行也調べ 奈良篇（三）……麻生路郎…（二）

ハワイの蛇……古川風竹…（二九）

貝釦……岡田某人…（二四）

滿洲雜記……湯淺小城子…（二六）

愚田舍の暦……小畑自由期…（二九）

柳川世界史（三）……戸田孤蓬…（二五）

★

不朽洞句抄……麻生路郎…（一）

近作柳樽……麻生路郎選…（二六）

川柳塔……麻生路郎選（六）

同舟近詠……諸家…（二三）

一路集 前眼金病……藤本蘭華選…（二八）

矢野赫堂選…（二八）

各地柳壇……（三〇）

川・協ページ…（二九）……柳界展望…（三五）

後記…（三五）……社關係の人々…（三六）

奥村丹路論 Ⅲ

高鷲亞鈍

Ⅵ

丹路論も遂ひに第三回連載といふ大掛りなものになつてしまつた。正直な話、未だ丹路氏と雖も春秋に富む未知數な青年川柳人であることには違ひないのではあるが、それでも一人の人間の內的、外的の諸生活に立入りその全貌を批判の對象とするには、そう簡單には片づけられないものがあり、さういつた作家論は甚だ至難な術でもある。又筆者としても、未だ人を知り人を受け容れる丈の人間も出來てゐない丹路氏とほゞ同年輩の若さでは尙更のことでもある。幸ひ路郎師が意外に力瘤を入れられ、御支援もあつて僕は作家論といふ第二段の仕事への端緒が發見出來得た事を欣快と思ふ。

さて第一回目は、序論として作家論の解釋と、僕の態度を先づ鮮明にし、作家丹路の人間的な印象を語り、本論に入つては丹路の「手」に關する句を拾つて、それから丹路の生活環境と自己の內的生活の矛盾を檢討して、以て丹路の作句態度とその存在理由を述べた。第二回目の前月號では、斯る丹路の句を選句指導をしたその師麻生路郎先生の選句態度と、それが柳壇への主情句（心境句）の登場となり、從來のリアリズム的傾向に偏してゐたのがロマンチシズムの文學主流を樹立した師の功績をたゝえ、ついで、僕の川柳理論を體系づけて詩川柳と、散文川柳とし、前者を主情的、ロマンチシズムと判斷し、後者を客觀的、リアリズムと概念規定をして一應頭を整理してから、丹路氏の句を前者の傾向を辿るものと認め、その例に感傷の句を引用し、且つ感傷の句の良惡を卑見し、續いて丹路の句から女性を拾ひ、歸納的に丹路の女性觀を結論に引出したのであつた。

今回は、その主情句に關し前回言ひ足りなかつた補足をなし作者が運命的な悲劇性——それ故に文學的で、宿命的な詩人性でもある——をその生活と感情に持つ故に彼の主情句と必然性がある所以に就て解明を試みたいと考へる。

誰をしも、所謂、家庭圓滿、商賣繁昌、無事息災で、精神的にも物質的にも何の苦惱もない變轍ない太平な人間には凡そ文學などは解らない。文學などする必要すらないかも知れないのである。よし、そういつた生活環境を人生の目的に置いて、今物質的に働いてゐる現實的な人間すらが、その努力勤勉は文學者の創造の苦悶に比して、はるかに低俗であり、卑屈であるとしか僕には考へられぬ。文學者の苦悶は物質的な換算では到底採算は取れないものではあらうけれど、然しその精神の貴族性に於て、或ひは高貴性に於て、神々の創造の喜びを分ち與へられるものである。とは薄倖なる詩人ヘルデルリンも言つてゐる通りである。そのヘルデルリンは生前、無名のまゝ、遂ひに狂死して了つて、後にゲーテやハイデッゲルによつて見出されたのである。

悲劇性。これは、凡そシーザーや、ナポレオンや豐臣秀吉などの英雄の末路でなければ、宿命的詩人の常住である。徒らに常識的世俗的の解釋でもつて、丹路の生活に陰影を落す如くに悲劇性をみる可きでは勿論ない。僕の思ふ悲劇性とは丹路の詩人的素養（ペルソナリテイ）を指していふのである。何故なら悲劇とか喜劇とかは、目に現れたドラマチカルなものによつて判斷す可きではなく、それは觀客の主觀によつて決定す可き事柄である。樂天的な男には悲劇も喜劇に見えるし、悲觀的な男は反對に、喜劇を悲劇に觀る場合もある。要するに丹路氏の生活にしても、普通なら何處を突いても、彼の環境、家庭に悲劇の有りやうも、おこり得やうもない、寧ろ、羨ましい御家庭であり、圓滿な御夫婦であり、親類緣者凡て御立派なものと察せられる。然るに一度、丹路が作家として、川柳人として起つた場合、彼は世間の夫であり、親である以外に、彼の創作は、哀しい悲劇的な表情をその川柳に表はすのである。或ひはそれは彼の周圍の者には、案外解き難い謎でしかなからう。恐らく、彼の令閨すらも、その謎はその意味の範圍では解らないかも知れぬ。凡そ詩を解するといふことは、その詩人の那邊に悲劇性があるかを見極めることである。丹路の川柳は、その悲劇的な秘密を探り當ることによつて、丹路の川柳の底に流れる主情が把握出來るのである。それは前回にも少し述べた如く丹路の一句を一句として獨立して觀賞することは勿論、川柳を語るに於て必要ではあるが、丹路の主情を知るとするなら、即ち僕の思考する詩川柳（これは僕の造語として認めて戴きたい三年前、路郎師は「川柳詩」といふ言葉はあるが「詩川柳」なる言葉は君の造語だと僕に斷言されたので、自分は確信した。詩川柳と川柳詩の概念規定の相

遠は別の機會に述べる）の觀點からすれば數句の連結によつてその作句精神（レスプリ）を認識することも許される。以上前書が長くなつたが、次にその悲劇性の一例として、昭和十四年四月ごろに發表した句の中に長女をもうけた父親としての最初の喜びの句が載つてゐる。その彼と彼の愛妻との間に誕れた女の子も今年で滿三年の片言を交へる最も可愛らしい盛りになつてゐる筈だ。嗚呼、然し、丹路はどうしたことか、彼の子供の句は餘りに悲劇めいてゐる。お子さんが、か弱いといふことは僕も聞いてゐるが、それにしても僕のいつかお宅で拜見した時は、――もつとも赤ちやんの時だが――丸々と肥つて、色の拔けるように白い綺麗な可愛いお孃さんだつた丹路は唯一人の愛兒に彼の悲劇性を盛り込んでゆかうとする、その詩人の宿命が、自分の事のやうに判る故に路郎師も考へようによれば悲劇的な存在であるとも言へやう。何故なら路郎師以外に誰が、彼のそういつた句を洞察して拔くであらうか。

長女出産

泣いてゐる泣いてゐるなり生れた子（昭和十四年四月）

赤ん坊の重みたのしむ日のあらた（昭和十四年六月）

斯くて樂しい初子の喜びを夫婦で分つたのも束の間で、

小兒科へ目方の足らぬ子を抱き（昭和十四年七月）

小兒科を親子三人見送られ（昭和十四年七月）

長女出産の前書のある句は四月の發表であるから、それから三ヶ月か四ヶ月目の赤ちやんを早速、小兒科のお醫者さんに診斷を乞はねばならなかつた丹路夫妻である。然しこれらの句は所謂、子を持つ兩親としては、世間の誰もが經驗する、樂しみと心痛を交互に覺える一般の感懷ではある。

綿のやうな雲の下にて子を抱き（昭和十四年）

子を抱きしめてこの哀しみは何ぞ（昭和十四年）

子を抱く女どこやら悲劇めき（昭和十四年）

他人目には幸福さうに子を抱き（昭和十五年）

赤ん坊時々鋭き眼を放ち（昭和十五年）

子の寢顔或は父をかなしませ（昭和十五年）

昭和十四年七月以降の彼の長女の句はこのやうに哀しみの對象に漸次置き換へられてゐる。僕はこれらの一連の句を詠む時父親として僕も亦同年頃の娘を持つ者として何故か、作者の哀しみに胸の疼く思ひである。哀しいといつた感傷の言葉に對する川柳語（文學として）の往々にして警戒す可き點は前月に述べたつもりである。しかしその子の父親や母親の愛情が丹路夫妻の場合、哀しい隈取りをもつて表現されることは一見、不可解である。子を抱きしめる父性愛や母性愛をもつてして何故に悲しく哀れを粧はねばならぬか丹路氏の長女が一般の幼兒に較べて虛弱兒であつたとしても、たゞそれ丈では單純に解決出來ないものがありさうである。萬一その哀しめるものが、その長女に無いとするなら、無心に寢入る天使のやうな子の寢顏を凝視める父親を哀しめるものは、結局父親自身の主情的な哀しみである。それは取りも直さず、丹路自身の詩人の悲劇性でなければならない。即ち哀しみの原因は、その幼兒にあるのでなく作者自身の悲劇的なエスプリに漂ふ哀愁でなければならない。かゝる哀愁は到底俗人には圖り知る事の出來ない詩人の秘密である。とジャン・コクトオは、「職業の秘密」の中でも言つてゐたやうである。

斯のやうに普通の感情からすれば、親の本能をもつてして、その子は歡喜の對象であり、家庭を明朗闊達にする原因ともなる可きであり、その子が家庭内で一人が二人、三人と增すと、そのやゝこしい、煩らはしさも生活ほど味氣ないものはない事も、僕の愚兒の宅で知つてゐる他人目はどうであらうと、子寶を抱く母親の姿は、それ丈で幸福であり、家庭の圓滿は象徵されて可い。よし乞食夫婦がその子供にお椀を持たせ、寒い夜もボロを被せて物乞ひする姿に街ゆく人の足を止めさせ、その不憫を、同情を惹かすものがあつたとしても、しかしその乞食夫婦にとつては、その子は懸けがへのない愛情のシンボルでなければならぬ。（その子供を功利的に解釋するのはこの場合、妥當ではない）然るに他人目には幸福さうに子を抱くと詠まねばならない丹路自身の主情は、唯事ではない。それなれば或ひは子供への愛情の逆作用であるのか。僕は讀者の中に萬一子供に對する普通の愛情を川柳に作句する表現技術として單に愛情を裏返した感傷の言葉を挿入したに過ぎないといつた皮相的な見解を持つ者がゐられるとするなら、僕はその解釋の不當を鳴らす者である。少くとも、己が子を素材にする限り、そういつた川柳的表現手段を弄する餘地は詩川柳作家には全然發見できないと考へる。恐らくその意味の皮相觀であつたなら路郎師は決して丹路の、あれらの句は拔きはしないだらうと信ずるのである。丹路の句は一體に於て、子供の句に限らず、在來からある川柳的表現法に用ひる皮相觀は見當らない。彼の句の獨自性は寧ろ、直情的な表現法にある。偶々その表現法に矛盾とか、反アイロニー語など、猪突として飛び出る時は、それは丹路の川柳以前の人間性の然らしむる所以であり、その內的生活の複雜性を暴露しただけのものである。文字の上だけで殊更に歪曲し、殊更に捻つて、それを川柳と考へてゐる古臭い川柳人では決してなかつた筈である。彼の主情句は其故に詩川柳として尊く正しいのである。

Ⅶ

僕はそこで、彼の身邊生活の句を拾つてみて、彼の句の如何に素直であり、直情的なものであるかを例證してみることにする。

鉛筆がないので二階からおりる（昭和八年）

陽のおちることを女中に教へられ（昭和九年）

偉人のことなど心足りし日は（昭和九年）

あらたまつておかしきは妻の顏（昭和十三年）

物干へ出て女中さん空を見た（昭和十四年）

海蒼し蒼し鋭きまで蒼し（昭和十四年）

妾の子また美しい生れつき（昭和十四年）

右のやうな句は、絕對に句會

などでは、披講にのぼりつこのない見落し易いが、然も捨て難い名句である。これらは必ずしも既に存在する川柳語とか表現を織り込ましたものではなく、寧ろ文章の一節に出て來る一齣の散文であり、日記の端に書く覺書風のものである。然しながら、それを川柳として採り上げた場合、汲めども盡きない柳味が、滾々として湧いて出てくるのが不思議である。此處でも僕の川柳理論の實踐が證據だてられたとみて嬉しい。即ち川柳はもと〳〵散文であり、その散文を十七字中心にして括弧に入れそれを川柳として新しく取上げるなら、それは作者の先天的な詩人性の故でなければならない詩川柳の詩性はその内容にあつて形式にないと僕は先に述べたのは、それが爲である。僕はこの機會に俳詩とか風詩とか、川柳詩とか提唱してゐる新興川柳の一派の迷妄を一言ひらいて置きたいと思ふ。それは川柳をその内容でなく、形式に詩性（詩的用語乃至は俳語）を注入し、以て俳句とも川柳ともつかない邪道を冒してゐることだ。川柳の形式を詩であると斷定するなら、僕は最近勤務の途上、電車の乘場などで實に感心した要領の良い標語を視てゐる。それは

乘り降りは押さず離れず順
序よく

といつた乘客の公衆道德に訴へるあの言葉である。これなど十七字の韻も含み、調子も相當なものである。だからと言つてそれを川柳とか俳句とかみる者が居れば僕はお目にかゝらない詩的形式を狙ふ川柳精神が是か詩的内容を持つ川柳形式が否かといふ問題は精しく論述する折を後日に俟つとして、川柳のその正統を散文精神による散文形式といつた徹底的リアリズムの僕の見地から考へて、川柳を散文形式に置かずして、詩的形式に置き換へることは既に川柳そのものゝ範疇（カテゴリ）からはみ出た邪道でしかない。即ち川柳はどこまでも散文形式を採る可きであるといふ事は、換言すれば川柳は所謂民衆の言葉でもつて詠まねばならないと言ふことである。それはその土地、鄕土、國、の民族詩として殘る唯一の文學であり、それなくして川柳の存在（レーゾン）理由（アートル）は絶對にあり得ないと僕は斷言したいのである。然も民衆の言葉をもつて詠むといふことは、川柳求道の者にしては、生成發展する生命の飛躍（エラン・ビタール）によつて民衆の精神の、その底にある無言の言葉を發見する努力でなければならず、それは川柳を神話的、古典的、傳統的な空間性でなく、時間的な文學藝術として所謂ロマン的詩川柳の方向にまで進められなければならぬとも考へられる。即ち川柳といふ散文藝術はその民衆の言葉を、固定的な、能や謠、歌舞伎の昔の文句そのまゝを現在にまで膠着さすのではなく、その時代に即應する民衆の新しい言葉をどん〳〵採り入れる生命的な飛躍發展のものとして思考す可きであつた。

路郎師の名句の由れは、その意味で喧傳されたものであると信ずるし、丹路氏の句の好評も亦、路郎師の薫陶を受けて爲した同じ意味合からでなければならない。

Ⅷ

さて愈々丹路論も、この項あたりで結論に入らなければならない。僕はそこで丹路も亦久しい柳壇生活をする一川柳人としての經歷からみて、柳壇の惡い傾向を多少共身に受けてゐる事を否定しはしない。その丹路自身の無反省は、當然、從來の川柳人一般の無自覺に罪を問ふ可きものではあらう。又その功罪を丹路自身が背負つてゐる點、指摘するのも容易である。

あたりまへの嘘となりし牧師の死（昭和六年）

銅像を仰ぐ衆愚の中にゐる（昭和六年）

義理を嘲ける星のばらばら（昭和七年）

同じ嘘なら絢爛たる嘘をつけ（昭和九年）

存在を無視して上座へ通る足（昭和九年）

酒呑まぬ日の五圓札たゞのさつ（昭和十年）

薄情な男いよ〳〵運に乘り（昭和十五年）

恩人へわが子ちさく座らしめ（昭和十五年）

などの句から、一應丹路の人生觀すら窺へさうである。しかしながらこれらは、詩川柳として銘打たなくとも從來の川柳觀からみても佳吟として、推稱するにたるもので、それは僕の殊更論評の對象にしなければならない問題も含まれてゐないやうである。尙、彼の日常生活から生れた句に、

どうする氣かと本箱に問はれ（昭和八年）

ドン・キホーテの傾向がある朝をゆく（昭和十年）

麟かれる靴と女のしあはせと（昭和十三年）

氣儘わがまゝ夏の夜の天（昭和十三年）

母の愚痴を聽いてあげたき夜の火鉢（昭和十四年）

クタ〳〵のハンカチを妻うけとりぬ（昭和十四年）

母のぐち聾になつてしまひたし（昭和十五年）

夫婦とは靜かなときのいい言葉（昭和十五年）

等見受けるが、これらは從來の川柳的表現とか用語をもつて巧みに主情を詠んでゐるあたり流石非凡なものがあつて可い。この句の中で面白いのは「母の愚痴」を詠んだ句で、昭和十四年の句と十五年の句では、全然反對であり、母親に對し、子供として時折抱く、親孝行と親不孝の心持ちが正直に出てゐるのが愉快である。

次に寫生句として、その季節を取入れて、佳句とみるより寧ろ理窟拔きに僕の好きな句では

あめいろの蟻つらなりて五月の雨（昭和七年）

物干にゆれる水着は蟹と赤（昭和八年）

乗客はみな横顔を持つてゐた（昭和十四年）

なにげなく覗く花屋の家の奥（昭和十四年）

秋すでに庭の隅なるガラス屑（昭和十四年）

などである。

最後に僕の苦手とするところであるが幸ひ、丹路氏が彼のスクラップに挿入して奥れてゐた發表句數の計算なり、統計なりを附け加へてみると別表の通りである。

年代	年齢	句數
昭和五年	廿一才	二五句
〃 六年	廿二才	三九句
〃 七年	廿三才	二三句
〃 八年	廿四才	二二句
〃 九年	廿五才	六五句
〃 十年	廿六才	八〇句
〃 十一年	廿七才	二四句
〃 十二年	廿八才	十五句
〃 十三年	廿九才	四四句
〃 十四年	卅才	一一一句
〃 十五年	卅一才	八六句
合計		五三四句

である。そして、昭和五年から八年を第一期、九年から十年を第二期、十一年と十二年を第三期、十三年から十五年を第四期とする。第一期は試作時代、第二期は人生勉強の時代、第三期は思想時代、第四期は結婚時代と見る可きである。丹路氏自身も言つてゐる如く、やはり發表句數の多い年、たとへば昭和十年、十四年、十五年は句も揃つてゐるし佳句も少くはない。約十年間の句數に五三四句は決しては多いとは言へない方かも知れないが、然し量よりも質に重點を置く、比較的寡作者である丹路氏としては名句は案外その中で多いかも知れない。或ひは今回の丹路論に、遂ひに名句を書き洩してしまつたかを惧れる者ではあるが、それは他日他の先輩によつて發見する機會が必ずあるであらうと信じ、僕はさういつた選者としてでなく作家論を語る上にその必要に應じ參考的に引用したまでゞある。その句の眞の良惡に就ても亦僕の關知せざるところである。

（完）

川柳塔

＝路郎選＝

沈思默考曰く考へときまつさ
酒屋からあんまり呑むなのふれがきた
消防車キチガヒの様に消えてゆき
兒のヒキツケへ二階から轉び
醫者の來る迄醫者の來る迄の本にあわて
ヒキツケへ兎も角妻を大喝し
八ツキ兒のくせにゴンタに成り居つて
病弱でお醫者の眞似が上手な兒
嫁さんにしたる筈の兒と摑み合ひ
孫の安否だけ親父夫婦が問うて來る
蔣介石の役でひろつぱもめてゐる

（福知山）小畑自由朗

悴國民學校へ入學待期

アデノイドも切りハシカも濟んで百もよみ
純皮のランドセルでも張り切つて
新體制だから休まず行くと云ふ
大學への爲に一錢貯金箱

悴の碑注文

石碑屋へ覗きに泣きに通ふ妻

女房はらむ

胃アトニーの僕へ子が死に子が生れ
腹の兒へハリバエビホスそれ卵

御時世へ歐文ケース置き換へる
活字から謄寫にもどし趣味に生き
廢合で活字潰しが直ぐときき
煮かへされ活字七生御奉公
ゲラ刷に誤植がないは物足らず
大組へ口校正が煙がられ

續活字斷想

（ホノルル）古川風竹

引揚げを嚙つて買うた住宅地
祖母淋し孫の寢言に聞く英語
統計の發表みんな人種別
支配人投手を讓るとはいはず

（ホノルル）前山北海

よく冷える話に鐘が遠く鳴り
人生の若さに變りない五十
一藝もなく生活と戰へり

（大阪）橋本綠雨

ストーブを焚く汽車阿寒あのあたり
いみじくも蜜柑氷つてゐるなさけ

オホーツク海に流氷を見る

氣まぐれに來た流氷と誰か知る
室蘭で初めて土を見る日也

西日本鐵道川柳大會に出席して

見飽かぬは大阪の煙砂埃り

二男相撲をとりて學童の足を折る

勝つて來て一層親を案じさせ

長女の火傷呪禁で癒る

まじなひは五十のたゞのおばあさん

町內會結成式

半分は子供總會下駄の音

（横濱）福田山雨樓

土いぢり僕には僕の主義がある

（兵庫縣）奥村丹路

訪ればお嬢さんにもひきあはし
天を突く巨いなる樹を欲しと思ひぬ
早春の素足に下駄をそろへさせ

或日のバスガールに

ほそい脚けふに堪へつゝほそい脚
仲居して明治生れをいつはらず
散髪をしてまつすぐに歸る也
紙とペン心貧しきものゝ手に
ある朝は改札口を突つ走り
朝の手を郵便局に來て汚し
愛すべき奴さと默殺されてゐる

大阪　大西八歩

東京に來て方言のあはれなり
雁次郎もうちのおばんも舊體制
ブロマイド中の一つはヒットラー
一人旅片手で足りるものを持ち
むし壽司の湯氣の向ふに歌舞伎の灯
足取りは素面ながらも春の風
國訛り雜ぜてよつぽど腹を立て
ブロックはパミールまでも耕やす氣

空襲下のロンドン

防空壕は霧讃美歌が流れて來
秒針の動きに似たる稼ぎよう

ハワイ　高澤一浪

三輪車肩にはペルシヤ猫をのせ
灯がつけば昨夕の元氣とりもどし
丸腰になれば名論にはあらず
慾未だすてず半身不隨にて
唇の色上げなどはよせ女
爪染めてひつかく足しにでもなるか
疊では死なぬ一億肚をきめ
我子まで姐さんとよぶ流行妓
鼻糞をほじれば白し雨の日は

銃後銃後女心と誰が言ふ

★

廣島　大森風來子

澤庵を切りながらござあます婦人
逸話など坊主に聞かす身の落目
水掬ふ手付きも醫者のハイキング
親讓りの達筆金になりません
言ひ譯けを巡査から〳〵笑ひ出し
モーニング間借りの壁にちと可笑し
すねる事が精一杯の意志表示
トランクの重たさ不幸な娘に見える

岡山　鈴木九坡

御時世か客の方でも世辭を言ひ
銀行のこんな音まで谺して
婦人用自轉車春を疾驅する
春が來れば春の衣裳へ夫婦もめ
露路深く深く借金取りに來る
古靴へせめて悲しい詩をつくり
利己主義者天氣豫報を聽いてゐる

岡山　逸見灯竿

近衞さんなどゝ懇意な人ばかり
一人二本酒の味にはまだ遠し
白酒へエプロンの母來てすわり
純毛のシャツにも穴のあくものぞ
風邪で寢た事を魚屋詫びて賣り
痩せた子へ又食はせすぎ飲ませすぎ

大阪　夷一笑

四月馬鹿今さらふるい手をつかひ
暖こうなりましたなあと立ばなし
追憶は春の光に似て樂し

兵庫縣　水谷鮎美

プロレタリヤ陽に齒を見せて喰ひ飽きる

實感が出ぬ女優さんのあわてやう
春淺き泥をおとしてさびしがり　徳島縣穴吹町　姫田夕鐘

酒をくれる電話ペコ〳〵頭下げ
とんかつとなる身の足を運びゐる

映畫・みかへりの塔（三句）

盜み喰ふ背中へ保姆の聲となり
愛に飢えたる姿石を投げてる
脫走の心構へゝ鐘が鳴り　大阪　後藤青兒

米一升提げて歸れと云ふも母
青年が革手袋の首卷の
三角の地面交番建つ話
木炭が買溜になる暖かさ　大阪府柏原町　宮岡白峯

妻病みて

音だけは一人前の台所
台所だけをのぞいた隣組

防空訓練

モンペイの腰が曲つてゐるのなり　大阪　正本水客

二杯目のうどんは帽子とつて食べ
溝の湯氣バス湯の街へ入るきしみ
吉日へ男きやうだい許りゐる
損得のない相談へ皆坐り
網棚の花を氣にしてゐる若さ
重ね足袋鳥の餌をやる女戸主
後家とほす姉ひとり子にきびしくす
支那へ行くのを淋しがる呑仲間
生活を變へる勇氣はあゝと云ふ　豊中　黑川紫香

花鰹一人で喰べる飯となり

道とへば農夫一服吸ひつける
借電話病氣見舞もして歸り
春の風教師と生徒歩いて來
すき燒と云へば子供が使する　大阪　丸尾潮花

六十の氣儘やつぱり稼ぎに出
倖な話伏眼のまゝで聞き
モーションと云ふをまぶしくそらしたり
塗り下駄が二つハウスを春にする
傷兵に嫁ぎますのと娘は元氣
義理一つ立てる羽織を借りに出る
ストーブは赤し戰地の話する　大阪　大坂形水

こんなとこに子と春陽に浸り居し
そこゝに鱈腹喰へぬを不足がり　神戸　岡田某人

どやと云へばあかんと答へお茶に立ち
夫婦して今度の米を掌に並べ
爪切れば爪の行衛も春の中
夕燒を雲丹の如しと酒客いふ
代用食ながらしやべりはよく喋り
兵滿載の汽車の地響き
腕組めば何やらむつとする如し
風采をかまはずきついことを云ひ　尼崎　酒井斗風

人使ふ立場さみしい事も知り
儲けてる話に嘘がまじるなり
社會面馬鹿な男があつてよし
不器用に名刺をだして親しまれ
轉業のあてなく風の街を行き
春を呼ぶ雨が素足に冷たすぎ

手袋の中へクツシヤミ二つする　大阪　北川春巣

赤ん坊にあくびうつされ時計見る

生存競争金魚一匹生殘り

病院のどの窓もみな春へ開き

盃を王手と云うてつきつける

下關　櫻川不水

内の子がいつち可愛い鳩ぽつぽ

朗らかに歌ひ酢もみの酢を忘れ

文化莊古玩具程ペンキ剝げ

支那の子と竝んで春の中にあり

廣島　濱田久米雄

道連れが山の高さに詳しすぎ

小春日和を金出しに行く

さからつて來る氣の眼付きかと思ひ

たまさかに來ればお醫者が去んだとこ

大阪　魚住滿潮

臣道實踐俺もお前も泥だらけ

カルモチンそんな度胸は僕になし

病人の指さす彼方春の月

口開いて百圓札を見てねたり

生み過ぎて惱んだこともある日本

お月様僕の財布をのぞきこみ

風呂屋の鏡にうつる肋骨

十錢を五錢に費ひ法に觸れ

男の兒東を向いて尿をする

大阪は錢の音から夜がしらみ

新聞に載つたが三ツ兒それつきり

大阪　清水史路

タクシーを弄ぶことも夢のやう

泥ン子の兵に南支の雲雀なき

飲むために喧嘩したかのよにもとれ

俺について來いとは云へぬ病弱さ

茶漬また愉し獨身工の意氣

鯛釣つたあの顏通夜の目に浮かび

圖躰のわりにこまめな茶を焙じ

さあやりませうと廻覽板が來る

廻覽板おゝきに頭撫でゝやり

大阪　清水白柳子

痩せてゐて米が足らぬと言ふあわれ

鮭買ひに行つて實績たづねられ

米國がどうで有らうと道一つ

訓練が足りてモンペも良く似合ひ

增産に猫の額の土地も入れ

大阪　中内翠芳

春の夜を大阪辯にとりまかれ

退院へ看護婦さんが梳いてくれ

嫁き遲れ聖書がどうのこうのと言ひ

日曜の雪へ枕をはづして寢

バナヽ屋の鼠バナヽへふりむかず

德島縣日和佐町　濱田賢次

私私と女ませてる

縮まつたとは呉服屋も聞き馴れる

そんなのは嫌と百圓のを覗き

日陰でも花は花なり咲きませう

長生をしてモンペーで笑ひ合ふ

台所バツトの客へ立たされる

くねりくねつて春が嬉しい木炭車

いざとなりや正成ほどの人ばかり

看板は出來たが社員集まらず

下關　多田市多樓

トンネルの向ふが見ゆるかなしみよ

陽溜にわが生きる道みつけたり

三月下旬このさわめきを春といふかな

堺　麻生アート

武玉川四編研究（十七）

梅本塵山
森東魚
蛭子省二

（430）**我斗はたちと思ふ角力取**

省二＝角力取が、自らおいぼれたと思ふ様になつてはおしまひ。

東魚＝私は反對にとつてゐる。人からみると體は大きいし、番ものゝ〳〵しく結つてゐるし、どうみても二十四五に思はれる。二十だと本當にみてくれる人はないと云ふ風に解してゐるが。

塵山＝年老いても猶勇氣の衰へぬ、角力であると私は解する。

（431）**湯たての神子をほつかりと脊負**

省二＝湯立の神子だから、おぶさつてゆくのである。

東魚＝ほんとに脊負ふのではあるまい神子を招いて湯立などする費用萬端を、いらざる口出しから、うかと脊負込んでしまつたのであらう。

塵山＝湯立の巫女が神憑りになつて後附添の神官がその體を横に抱へ、又は肩に掛けて其場を立去るので、脊負ふとも云はれる。

（432）**またふよ〳〵と鬼かわら出來**

省二＝燒たての鬼瓦丈けに與。『門松のなぐれ今戸で鬼をやき』。

東魚＝土で、でつち上げた計りの鬼瓦まだ柔いのであらう。あの六ヶ敷い御付の鬼瓦が、ぶよ〳〵だといふ可笑しさ。

塵山＝少しもくすぐりでなく、滑稽至極の句。

（433）**大かたしれて居たる生靈**

省二＝大かた判つて居るところに、生靈としての興味も感ぜられ、始末もしよい。『金ですむとは安い生靈』（武・十八）などとある。

東魚＝戀頃ひの對手は、見當がついてゐるのであらう。

塵山＝離別した先妻の生靈らしい。「源氏物語」の葵の上とも思はれる。

（434）**高聲の娘に毒ハなかりけり**

省二＝明朗、無邪氣。

東魚＝くつたくのない若い娘の明朗さ。

塵山＝未だ春情を解せざる處女。

（435）**をつかむハ戀のはします**

省二＝だから、戀の闇といふ。『戀の闇明るくなれば命がけ』（武・六）だ。

東魚＝闇をつかむとは、闇夜を好機として忍ぶ意味であらう。

塵山＝下婢の閨へ這寄るのであらう。

（436）**人間の霞はしめハ寢卷より**

東魚＝寢仕度をして、さて、それから神秘の霞、閨中の趣となるとでも云ふのか。どうも難句である。

塵山＝人間が寢て目を閉づれば、山に霞の掛る如く、萬象がみえなく成ると云ふの歟。

省二＝寢卷よりとあるから、床に就く事にならうが、霞はじめの他の用例を知つてからでないと、解が下せぬ。

（437）**夫婦九十の指折に成ル**

省二＝俱に長命。お前百までわし九十九迄。

東魚＝夫婦揃つて九十以上といふのは古今共に稀らしいことであらう。

塵山＝新橋の渡り初めには、眞先に引出される。

（438）**蠅の命も行く〳〵ハ酒**

東魚＝蠅も酒に落込んで死んだりする。大酒家の命と同じだと興じたのではないか。

塵山＝酒に溺れて死するは本望であらう。

省二＝確に蠅は酒に溺れる程酒好きだから徹底して居る。其角の作に「富士の雪蠅は酒屋に殘りけり」。

（439）**印籠はかり光る上人**

省二＝上人は老い玉ふ。

東魚＝誠に印象的な面白い句と思ふ。

塵山＝僧侶の腰には、印籠を提げぬと思ふが、少し疑ふ可きである。

（440）**使の聲の高い青海苔**

東魚＝青海苔の贈物をもつてきた使、定めし濱育ちの高聲をあげたであらう。

塵山＝此の使といふのは、伊勢の御拔箱を持つてくる、御師の雇人であつて、青海苔はその土產である。

省二＝青海苔とせず、初海苔の方が、「聲の高い」には適應して居ると考へてゐたが、御師關係の句ならば青海苔であらう。たゞ「使」とあるので、普通の場合のやうな氣がしてならぬ。御師の方は供と云ふ場合が多いのではないか。

（441）**松魚によふて江戸を怖かる**

省二＝鰹の中毒。反面、初松魚禮讃句だ。『鰹の罪は醉て顯れ』、『醉ぬ鰹を草の戸の曠』（武・三）

東魚＝「怖がる」に、都なれぬ人物がよく出てゐる。

塵山＝鰹は必ず醉ふものと、誤認してゐる奥山里の人もある。

（442）**願叶ふて　妻く成ル神**

東魚＝願が叶つたので、そのあらたかさに、寧ろ恐しくなつたと云ふのである。

塵山＝神杉の幹に打込んだ。咀ひの五

寸釘の利目が現はれて、自ら戰慄するとであらう。

省二＝初篇に『顧叶て怖しい町』があつた。武玉川には「凄く成る」といふ言葉をよく見出す。『愛相過ぎて凄く成る母』（武・六）

（443）

盗れた伽羅を又聞松の風

省二＝松風を聽いて、あの盗れた伽羅を思出し、自ら香氣鼻をつく感じ。

東魚＝松風にのつてくる伽羅の香に、盗まれた伽羅を思ひ出したので、松風は場所の越、庵とか別莊とかの連想に置いたのであらう。

壓山＝大阪浪人が戰後に乞食となり、懷中に闌奢侍を入れて居た、と云ふ小說が有つたと記憶する。

（444）

けふも長閑て靑い掌

東魚＝紺屋が長閑な好晴に、染物をしてゐる趣であると思ふ。（嘗て川柳詩社で問題となつた句だ。病餘の人が長閑な春日の下に、靜脈の靑々とみえる掌を眺めたりしてゐる場合との解が出て、それは解者の力負けであるとして、私が前記の說を出した事がある。今でも其說を私は固持してゐる）。

壓山＝紺屋說に贊成する。

省二＝六夜待の句に、紺の手とか空色の手とかあつて、紺屋さんを表示して居る。

（445）

手を一はいに家鷄追込む

省二＝手を一ぱいは巧み。

東魚＝兩手をひろげてゐる姿。

壓山＝田園の一風景、實在の圖である。

（446）

案しる事の知れぬ關守

東魚＝何を考へてゐるのか、しかつめらしい顏をして默然としてゐるが、と云ふのであらう。

壓山＝無言で嚴然と構へてゐる態は、他人の目に物案じてゐるやうに見える。

省二＝沈痛な面持ち。

（447）

狼と眞向に成て夜か明る

省二＝狼に出會つて、進退谷まり、遂に段々と夜明けとなる。

東魚＝前說の如く考へるより、外なさうに思ふ。

壓山＝送り狼であるが、途中で轉ばぬ故に、僥倖に命拾ひをしたのである。

省二＝送り狼である。夜行の人の跡を追ふ。

（448）

先の脊中へ咄す羅漢寺

省二＝江戸名所圖會に挿繪があるが、本所五ッ目の羅漢寺は、七月は殊に參詣者群を成せしといふ。五百羅漢の、どの一体かゞ、必ず自分の親に似てゐるとか或は自分に似てゐるとかいふ。『羅漢寺で女術に似たと禿泣き』の古句がある。前に參詣して居る人へ、後から一脊中へ一話かけるのだ。

東魚＝話かけられる人は、しげ〳〵と羅漢の中の一体に、見入つてゐる場面が想像される。

壓山＝參詣人が雜沓して、肩越しに話し掛けるのであらう。

（449）

たま〳〵不二の臼も三崎

省二＝サンサキは谷中の町名と思ふが不二の臼がわからぬ。

東魚＝「不二の臼」を駄勞解にもならぬ程の想像をしてみれば、臼代用に摺鉢を用ゐるのではないかと思ふ。（大震災の節、玄米を摺鉢で精けてゐた人があるので）。場所は三崎邊にある草庵であらう。

壓山＝昔は駒込の富士祭に、土產として新麥焦を多く賣出したるが、その粉を挽く石臼にて、偶々谷中三崎の擔守稻荷に供へる、團子の米粉を挽くといふのではない歟。富士擔守兩社の距離は餘り遠くはないのである。

（450）

此うら舟　に石町　か鳴ル

省二＝『石町は江戸を寢せたり起したり』の石町の時の鐘。「此うら舟」とは婚禮の事。『はづかしさ尾上の鐘を聞いてゐる』

東魚＝前說贊。

壓山＝『遺愛寺の鐘はお乳母の御里つき』と云ふ句もある。

武玉川四編研究正誤表

（二〇四號）

（頁）	（段）	（行）	（誤）	（正）
十	二	一	寄拔	奇
十	四	四	見れくは	見れは
十一	二	九	東魚ノ二字脫落	
十一	四	二十	無心丈	文

（二〇六號）

十一	二	三十	夜の中	庭の中

吟行地調べ

奈良篇（二）

麻生路郎

（8）大鐘樓

★奈良の印象は鹿と大佛と釣鐘だと云はれてゐるが、東大寺の大鐘樓はいかにも豪宕であり魁偉である。

★創建は天平年間で、現在の建物は鎌倉時代に再建されたもので、釣鐘は天平勝寶四年三月七日に鑄成されたものである。治承四年の源平の戰火で鐘樓が燒け、梵鐘が墜落したので、東大寺では、釣鐘の釣鈎だけを修理し、鐘自體は昔の儘であると稱してゐるが、最近京都工藝の青木教授は釣鐘の形體から觀て鎌倉以後に再鑄されたものであると言はれてゐる。

★其の構造樣式は所謂天竺樣式と稱され、高さ一丈三尺六寸、徑九尺一寸、厚さ八寸、重量四萬八千九百斤の大鐘がブラ下がつてゐるので、たしかに力學的驚異である。

★この大釣鐘は日本最古のものと云はれ、京都智恩院、方廣寺の大鐘と並べて大釣鐘の三幅對と云はれてゐる。（其後、大阪の天王寺では高さ二丈六尺といふ更に偉大な釣鐘が出來たことは出來たが、造り方に故障があつて撞いても鳴らない）

★この釣鐘を詠んだ古川柳では

大きながぶらりしてゐる奈良二郎

奈良二郎其名は四方になりひびき

木辻の里でにくまれる奈良二郎

などがある。

大佛の鐘杉をぬけ杉をぬけ 五葉

家族連れ兄イちやんの撞く奈良の鐘 普天

もう五錢出して釣鐘つき直し 生々庵

釣鐘をおどけて外人一つ撞き 白面人

奈良二郎つかひ果した人も聽き 路郎

早鐘と二人同時は嚴禁

（一撞ごとに五錢申受く）

（9）大佛

★東大寺の金堂（大佛殿）は天平勝寶三年の創立であるが、治承四年の平重衡の亂と、永祿十年の松永久秀、三好康長の爭亂の戰火に罹つて燒失した。

今の堂宇は元祿年間、公慶上人によつて再建を企てられ、寶永二年に上棟したものである。その大きさは最初の三分の二だと云はれてゐるが、桁行、梁間各七間、重層屋根四柱造、本瓦葺で、正面唐破風造、銅板張り棟の兩端に金色の鴟尾をあげ、規模宏壯、木割又雄大で江戸中期に於ける最大最秀の建築で、現在世界の何處を探してもこれ以上大きな木造建築はないそうである。

★本尊は毘盧舍那佛で天平十年鑄造を始め、三年間八回に分鑄して出來上つたもので、頭首は三度落ち最初の藝術的價値を多少失つてはゐるが、蓮瓣の蓮華藏、世界圖の毛彫に至つては正に天平の代表的傑作と云へる。

★堂前にある高さ一丈三尺の八角寶珠形の銅燈籠は八面の火袋に精密な圖樣を鑄造し、日本燈籠中の白眉と稱されてゐる。

★大佛師は國中の連（むらじ）公麻呂（祖父は百濟の人で、公麻呂は歸化人の孫）で、公麻呂の監督の下に、高市連大國、柿本小玉高市連眞麻呂の三人が鑄たのである。

★大佛殿の本殿は東西三十一間二尺、南北廿七間四尺六寸、高さ廿六間四尺六寸で、柱の數が六十本である。

★本尊の寸法は御長五丈三尺五寸、面長一丈六尺、眉長五尺四寸五分、目長三尺九寸、鼻前徑リ二尺九寸四分、鼻高サ一尺六寸、口長三尺七寸、耳長八尺五寸、肩長二丈八尺七寸、胸長一丈八尺、臂長一丈九尺、腹長一丈八尺、肘至腕長一丈五尺、左手大指廻リ四尺八寸、同長サ四尺四寸、中指廻リ三尺二寸、同長サ五尺八寸、小指長四尺四寸無名指長五尺三寸、頭指長五尺四寸、手掌六尺五寸六分、同幅六尺八寸、右手手頸廻リ一丈三尺五寸、右足足裏直徑一丈、同大指三尺二寸、同廻四尺二寸、膝前徑リ三丈九尺厚七尺、螺髮九百六十六各高サ一尺徑リ六寸蓮花銅座大小五十六枚、同高サ各一丈徑リ六丈八尺である。なほ鑄料（太古斤兩斛）は熟銅七十三萬九千五百六十一斤、練金一萬四百四十六兩、白蠟一萬千六百十八斤、水銀五萬八千六百二十兩、炭一萬六百五十六斛、後光一基高サ八丈三尺、横二丈五尺厚サ五尺化佛十六體自九尺至八尺である。

大佛を詠んだ古川柳では

大佛は見るものにして尊ばず

が有名である。

菩薩から大佛になる民の汗 力好

次に今人の句を列擧すると

大佛は埃とともにおはしまし 白面人

大佛へ手を合はさずに出たが知れ 紋太

大佛の脇の佛は忘れられ 万よし

大佛を大きなものと云つておき 力好

奈良は雨大佛だけを見て戻り 眠聲

大佛へ來てまち〳〵の列になり 松郎

蓮瓣へかくれる背丈かと思ひ 葭乃

大佛の膝に平穩無事な春 アート

等々の句がある。

以上の句から觀ても、大佛は拜まれるといふよりも親しまれてゐることが判る。

（10）奈良墨

★ペンとインキの世の中になつても、色紙や短册は筆と墨でかく。その墨は昔から奈良の名產の一つである。

★墨の主成原料は油煙又は松

煙で、これを膠で練り固め、香料を加へて製するのである。油煙製が上等で松煙製は下等である。

★墨を作るのは油煙か松煙に膠を湯煎にした溶液を注ぎ、煙百匁に膠六十匁の割合で配合させ、適量の香料を加へて攪拌し寄せ固めて、更に揉み軟らげ、永く練り込めて材料を出來るだけ柔らかにし、充分光澤を發するに至つて、これを棒狀にし、所要の長さに切つて、枇杷か梨の木で作つた型に入れ、壓搾機で暫らく壓した後、型から取り出すと柔らかい墨が出來上るのである。

これを灰の中に埋めて、灰に水氣を吸收させ、灰を毎日取替へ、約半月で、大體乾燥を終つて灰から取出し、吊し柿のやうに繩でぶら下げ、一ヶ月餘り風燥にし、時期を選んで灰を洗ひ落し、墨の表面に仕上げ色留めを施した後、模樣を彩色して完成するのである。墨の表面が漆黑に光つてゐるのは仕上げの際に貝で磨いたので、金色をした墨は型に入れる時、金箔を卷きつけて壓搾し、取り出してから更に金箔を補つたのである。

★墨の職人は墨を練り固めるので、手足は勿論、額までも眞ッ黑になるので素ッ裸で製造をする。仕事が濟むと、風呂に這入ることになつてゐる。その風呂も普通の風呂では一人這入れば、あとの人が這入れないほど湯が黑くなるので、一人宛這入れる風呂が多數並べて設けられてゐる。古梅園の工場内の風呂(寫眞參照)では、片側に六個設けてあるから、六人這入れる。その風呂で、大體洗つて、片側にある風呂に次ぎ〳〵と三風呂ほど這入つて、元の身體になるのである。恰度繪筆を筆洗で洗ふかたちである。

★墨は漢の代に、[illegible]麋山の松煙を採つて造つたのが始めであるが、墨の名は染みから轉化したのだと云はれてゐる。我が國紀州藤代の墨のことが記されてあるが、勿論後代のことである。其の後、近江の佐武、丹波の貝原、京都の北山等でも墨を製したが永續しなかつた。雲紫墨、伊豫墨、並びに讃岐墨などが書に見へたけれども雲紫は早やく絶へ、伊豫、讃岐は松煙の產地となつてしまつた。結局奈良墨が永く命脈を保つた譯である。

東大寺大佛

★前述の如く奈良の油煙墨の濫觴は室町時代であるが、天正年間に松井又三郎道珍が奈良で製墨の業を創め、大いにその製法を研究して良質の油煙墨を製するやうになり、慶長八年初めて之を幕府に獻上して、土佐椽の官を賜つたが、この後、奈良では製墨を業とするものが相次いで起り、貞享・元祿の頃には道珍の子孫が營む古梅園の外に餅飯殿町の森丹後、森若狹、油留木町の福井出羽、鍋屋町の大森和泉、押上町の福井備後、今御門町の藤村土佐、藥師堂町の甲田出雲、高天町の大墨屋但馬等があり、何れも官名を許されて盛大な商ひをしてゐた。

★元文四年には道珍六代の孫和泉椽松井元泰が官許を得て崎陽に航し清人について彼我の墨法を交換研究して名墨を製し弘く奈良墨の聲價を高揚させた。

★古川柳には奈良墨そのものを詠んだ句は見當らなかつたが、

筆の毛のあるくを墨屋うるさがり

墨の出る町には筆もいきてゐる

の如き、鹿に關聯した拙づい句がある。

今人の句では

千年の歷史を墨の匂にしのび　生々庵

がある。これはいゝ句だ。

古梅園くづしに洗ふ鳳呂が沸き　艸樂

古梅園機械化などは考へず　同

機械化の句も面白い。

奈良墨をすつて揮毫をたのむ也　馥乃

硯を洗いて見なほす奈良の紅花墨　同

八十の手習ひ奈良で墨を買ひ　路郎

老人へ土產の墨は荷にならず　同

お土產にしては奈良墨嵩がなし　同

★奈良の名產、奈良墨を紹介した序に、藤田祥光氏の未發表原稿「奈良名產史」によつて奈良に於ける古今の名產の種類を列擧して置かう。

禹餘糧、木燈籠、釣燈籠、石燈籠、具足、饅頭、[illegible]酒、酒、糟漬瓜(一名奈良漬)、李糟漬、蕨餅、居傳坊、金剛草履、護命味噌、足袋、刀、團扇、換掌箋、櫟實、大和柿、春日盆、鹿細工、煉鹿、土風爐、青丹吉、火打燒、春日藤、東大寺蘭奢待、興福寺銀杏、禰宜屋敷木練柿、鐙、暦、色墨、付硫磺、朱朱墨朱肉、水屋納豆、奈良人形、奈良晒、奈良漆器。

(11) 神鹿

★奈良の鹿はロマンチストである。千年の昔をしのんでゐるのか、すこぶる間のぬけた顏をして、遙か向うを眺めてゐるかと思うと、ぞろ〳〵と地に落ちてゐるものを探がし求めたり、餌を要求して奈良に遊ぶ人たちの袖をひいたりする。ふしぎと人間に親しみ、人間に親しまれてゐる。

★神鹿の數は凡そ八百だと云はれてゐる。年々殖えるとも聞く。嘘の三八で、八百といふ數字が出たのであらう。千近くゐませうといふ人もある。春日神社の燈籠の數と神鹿の數とはハッキリ判らないのがホントらしい。あの鹿の群の中には奥山から出て來る野生の鹿も交じつてゐるが、山鹿は公園の里鹿と習性も違ひ、人を見ると逃げる。喇叭が鳴つても歸らないで木の下や芝原で一夜を過ごすのだそうである。神鹿でありながら鹿苑(神鹿飼養所)に戻つて來ない鹿もゐるさうである。こんな鹿を奈良の人たちは不良呼ばはりをしてゐる。

★日浸近くなると、（この頃は四時）番人が喇叭を吹く。その音を聞くと四方からゾロ〳〵と歸つて來て柵の中に這入る。もう喇叭がなるころだと思うと戻つて來て柵のあくのを待つてゐるのもゐる。彼等に與へられる飼養所での食事と云へば夕食の一食ぎりである。朝は食事もせずに、鹿苑を出る。そして旅人の手から與へられる糠せんべいに養はれる。

★鹿は飼養所に戻つても、小屋に寢る譯ではないが、それでゐて滅多に病氣をしない。鹿の健康狀態は三、四月頃の遊覽客の多い時に、喰べ過ぎて胃擴張で斃れる位なものである。

★鹿は植物性のものであれば何んでも食ふ。紙でもムシャ〳〵と食ふ。筆者は雨の日に東大寺の前で、三疋の鹿が、番傘を引ッ張り合つて、バリ〳〵食つてるのを見掛けたことがある。公園の細い木の幹が割竹で包んであるのは鹿に害されないためである。こんな調子で何んでも喰べるが、ただ馬酔木（あせび）だけは毒と知つて食はない。

廣い公園が割合に掃除の行屆いてゐるのは、鹿が芝生には肥料を與へながら雜草や落葉や遊覽客が殘して行つた古新聞などを、スッカリ食つて呉れるからである。

★鹿の交尾は秋で、懐姙は十ケ月、分娩は翌年の六七月頃で公園の木の下や根株の傍で安々と仔を產む。生れると間もなく仔鹿は母鹿と一緒に歩いてゐる。仔鹿の高さは一尺五寸以内で色は美しく斑紋が明らかに見えてゐる。一ケ月位は乳、それから草を試みる。滿二歳頃から角が生え始め、その翌年から枝が岐れて來る。生えた角は翌年の秋に落ちて又生え代り生え代りする。

★鹿の毛色は時節によつて變る。三月末から所謂「かのこ毛」になりはじめ、四月から五月で完全になり、茶色で光澤が出來斑紋が白くて美しい。夏はその儘で九月ごろから毛が拔け變つて、穢い薄茶色で艶もなくなり紋も穢くなる。紅葉の頃となると全く、枯葉の色になつて冬を越すのである。紅葉の下に紋の美しい鹿を畫くのは全く繪空である。

古梅園の風呂

★角は牡ばかりにある。交尾期の秋になると雌を奪合つて、屢々喧嘩をする。平常の溫和なのに似ず、雌を呼んで鳴くころになると氣が荒んで來て、人に突掛つたりする。婦人や子供などは殊に侮つて突掛り易い。

★鹿の年齡は平均二十五歳だそうだ。

★神鹿保護については昔は德川幕府から五百石の朱印がつけてあつたもので（興福寺朱印が同じく五百石）今は神鹿保護會を設けてそれに當つてゐる。

★鹿を詠んだ古川柳を擧げると、

内談で鹿を手杵でおつぱらひ

蜜柑をも鹿へあたらぬやうに投げ

朝起の土地に寢てゐる奈良の鹿

朝寢の門へはきつける鹿のくそ

昔は神鹿を殺した者は極刑に處せられたので、鹿が萬一自分の門に死んでゐると大變だつた。若し自分の門に死んでゐたら、ソッと隣りの門へ移してしまふ。それで自然奈良の街の人たちは朝起になつた。朝起や朝寢の句があるのはこうした理由からである。

今の句では

鳥居まで鹿を誘うて來て寫し　潮花

ここからが奈良公園の鹿を見る　美奈子

奈良の鹿ヂヤーナリズムを心得て　アート

圓服が鹿の玩具を買うて去に　白面人

夫婦の鹿か高低にゐる　かほる

寫眞師は鹿のポーズになれたもの　生々庵

金髮の手にも寫る奈良の鹿　青兒

鹿が居るので子供奈良が好き　同

知らぬ間に鹿に卷かれた立話　葭乃

牡鹿より背が低くかつたお母さん　同

拾ひ屋のやうに出て來る奈良の鹿　路郎

鹿おもへらくなるほど刀掛け　同

（12）鹿せんべい

★鹿の餌は糠煎餅で、春日の境内や公園のあちこちで賣つてゐる。

★鹿苑を朝出た鹿は、サッサといつもの場所へ出かけて行く。隨分遠いところまで出掛ける鹿もゐるそうだ。魚釣る人が、いつもの場所へ腰をおろすやうに、鹿もなるべく餌を澤山呉れそうなところへ出掛けるらしい。

★糠せんべいは一把が十枚あつて五錢である。近ごろは糠がすくないので、せんべいもうすくなつてゐる。三十年も前には二錢五厘であつたが、それが三錢になり五錢になつた。十五枚五錢時代が一番長く續いた。

★糠せんべいの賣子は大ていお婆さんで、大阪あたりの夕刊賣のやうに一つの内職である。境内での販賣には土地使用料と組合費として、せんべいの封緘証紙一枚について一錢五厘六毛ほどを神鹿保護會へ徴收されてゐる。それ等の販賣人の組合は神鹿飼料糠煎餅製造販賣同業組合といふ長つたらしい名で組合員は五十名ほどである。

★糠煎餅を燒いてゐる家が、最近まで八軒あつたが、戰死者があつて一軒減つて七軒になつてゐる。原料は小麥粉とメリケン粉と糠である。藥糠で出來ぬこともないが色が黑いそうである。燒けたら錐で穴をあけ紙撚を通し、一把へ一枚宛証紙を貼るのである。

★糠せんべいは、いつごろから賣り出したものかハッキリしない。古句を探して見たが見當らぬ。

ほろ酔ひが一トロかぢる糠せんべ　葭乃

もつとさきでと糠煎餅を買ひそこね　同

内職も鹿せんべいは長閑也　路郎

女學生鹿せんべいを持つて逃げ　同

糠せんべい持つたがいつちあとになり　同

せんべいの薄くなつたを鹿も知り　同

御入院は——
——ご應にめ需

谷内小兒科病院

醫學博士　谷内與一郎

大阪市港區市岡元町一丁目（電車道）
電話　西四四八一番
八〇三七番

川柳世界史

（Ⅲ）

戸田孤蓬

火食說燧人之章に入れておく
結繩でせつない胸をうちあける
思ひつき又思ひつき楷書出來
筮竹の竹を伏羲は捜しに出
藥草の綸解きも描いた神農氏
指南車へ大將共の顏がより

大昔の事はボットした所に値打をもたせて堯舜の世をデッチ上げる。その中で稍たしからしいのは曆を作つたのと黃河の治水を行つた事である。工事にあたつたのは攝政の舜で、堯と舜との交代はきれいな禪讓と云ふ言葉で語られてゐるがそれ程平和裡に行はれたものかどうかは疑はしい。

東奔西走我家の前を走る禹よ
番頭と息子と力くらべられ

舜の次は禹がはじめて國號を夏と定めて王位につく。夏の九州を型取つて九萬人かゝらねば運べぬ九鼎――鼎の輕重云々の語源――を作つた。禹の次に禪讓をうけるはずの益は禹の子啓のたのむに足る人物である事を見ぬくとあつさりと野に下る。こゝに世襲が始まる。十七代癸王は所謂桀でさかしらな妃末喜に操られて國事を誤る。

九鼎大呂とにかく話大きすぎ
（大呂は周の大鐘也）
お妃の影は動かず裸女は舞ふ

この夏を亡したのは湯、後の殷である。湯王は賢人伊尹を用ひ善政を以つて人心を收めた。十七代に至つて都を洛陽に移し二十八代の辛王が又紂と綽名される暴君で周の時代にかはる。

得心のゆくまで主君試驗され
雨乞ひの犧牲に湯王立つつもり
王城をとられて桀はあきらめる
御妃が肉の林の芯に立ち

太古の印度

色は黑いが白いヨーロッパ人と同じアアリアン種のインド人はパミイル高原から南東へ山を下る。はじめてインダスの流れを見て「シンドー（海）」と思つたのがインドの語源だとか。原始のドラビタ族を追つて定住。人口增加がそこに四族制が出來爾來全民衆の知性と進歩を奪ふ即ち僧、王、平、賤である。文明の第一期は宇宙の眞理をうたつた詩篇吠陀の出來た時代。第二期はその通義書ウパニシャッドがあらはれバラモン敎の高揚時代。全ての學術はバラモンの息の下に生れ、發展しバラモン自身を窒息させ、シヤカムニ出現の必然性を形成する。

衣食住足れば四族の五千年
眞善美只合掌があるばかり
バラモンのおきてに寡婦は死ぬ覺悟
エネルギー餘れば難行でもしたく
階級をたしかめて書くラブレター
性（カーマースートラ）經神の敎として讀まれ

太古の支那

世界文化の殆ど全てが衣食住の豐かな熱帶地方に發生したのにひとり支那文化丈けは溫帶地方のしかも海から遠くはなれた黃河の中流に起つたのは全くかの肥沃な黃土のお蔭であつた。

黃土禮讚黃色は王の色とき め

支那の最小社會單位は「邦」である。邦の長を后、萬邦の長を群后、その上に元后即ち後世の天子にあたる位がある。有德の士を以つて元后におすあたり君主制より共和制に近く禪讓と易姓革命の名で大統領選擧に似た政變が行はれてゐた。

絕對の忠に禪讓尙遠く
流星しきりもう君でなし臣でなし

支那史の傳說時代に三皇五帝がある。燧人は火を敎へ、伏羲は八卦牧畜を、神農は農業醫藥を黃帝は指南車を發明し、さらに顓頊、帝嚳の闕史時代をへて堯舜の時代へ進む。

戰線の將士へ
日衣の勇士へ
慰問品を
慰問袋
慰問品賣場　一階
實用百向店
松坂屋
大阪・日本橋

近作柳樽

路郎選

女子事務員の退職（三句）

美しき小鳥の一羽樹を離れ　尼崎　小林文月
又別の波にもまれる乙女にて　同
同じ事三年間を續けし娘　同

三月五日姪生る（二句）

次の代の國婦の一人生れ出で　同
早生れ祝のタオル間に合はず　同
代書人うどんのヒルで又續け　同
代書所の疊のへりがちとちぎれ　同

台灣雜吟（三句）

台灣に育ち理想と別に嫁き　台北　横山勝二
朝の陽がぬがした羽織風をひき　同
竹の家襦袢一つで兒が育ち　同
踏切の親爺は人がきらひなり　同
痩せて居るだけで不遇と見る舊知　同
停年が今年の指を陽へすかし　同
合槌を打つた方にも金はなし　伊丹　酒井美知夫
ぬり替へた店の名前も支那料理　同
歸還兵綻び位縫へるなり　同
煙草好き齒醫者へすまぬ息をかけ　同
とんびの輪電工さんも唄うて居　同
大いなる虹立ちにけるドラム風呂　南支　米谷松太樓
妹のある戰友が羨まれ　同
戰友と待つたが多い王手飛車　同
小孩と侮りがたい荷を擔ぎ　同
上京へうるさい程の母の愛　神戸　卑上一扇
不合格のとこへは帽子着ずに行き　同
おしまひはきつとお前が頼りなり　同
物干しの暖さ知る原料不足　同
子をあやす瞳聖なるものに滿ち　愛媛縣大洲町　米澤曉明
子守歌上手も下手もなかりけり　同
雨の日の緣のおむつも邪魔でなし　同
持駒を度々聞いて負となり　同

慰問演藝大會

笑らはせる場面白衣に多すぎる　松江　本庄進一路
事務多忙いたはるようにお茶をつぎ　同
何でもないことが秘密な女學生　同
呼鈴へソプラノぴたと止まつたり　同
花嫁の簞笥モンペが入れてあり　和歌山　森田カズエ
まゝごとも米食時間決めてあり　同
小兒科は殺されさうな暴れやう　同
節米へ女中の智慧も借りられる　同
同情がよる繃帶が大きすぎ　岡山　本田ユリエ
有形無形友の感化もまうたし　同

滿洲雜記（三）

湯淺小城子

家の周りに、或ひは部落の圍壁に、銃眼を造つて居るところは、世界中滿支のみ、といつても決して過言ではあるまい。昔は專ら之に依つて匪賊に、應戰したのである。だから銃眼の存するところ、必ず匪賊の話はつきもので、古老等に尋ねると、何時間でも、當時の體驗を物語つて呉れる。

匪賊に拉致された村長の話、匪襲にこりて其後は、庭の一隅に穴を掘つて、財物をかくして居た富豪の話、等々個人の被害から始まつて、更に之を防ぐための、部落全體の經濟的、精神的不安と不擔の話、等々盡きるところを知らないのである。

銃眼へ昔を語る古老の手

○

滿洲に住み、滿人に交つて生活してゐる我々にとつて、彼等が、どこでもかしこでも、一向頓着せず、いたるところで手鼻をかむのには閉口する。苦力、農民階級は固より、相當の知識階級に屬する人達でも、臆面もなく、之をやるのだから、誠に仕末が悪い。先年も奉天省S縣に行つた時、同行の某大臣秘書官が、列車内で盛んにこれをやるので、弱つた事がある。ただ然し一言、彼等のために辯ずるならば、彼等が手鼻をかむ動作

はつきりとした娘岩波文庫よむ　同
これが人の姿か夜汽車あはれなり　同
米をとぐ妻のモンペを氣强く見　東京　田中青風
節米へさりとて金魚にもなれず　同
きくよりも指を尺八見つめられ　同
會計へ妓二人の意地を見る　同
お祖母さま一寸浮れた越後獅子　大阪　新谷柳風
お土產の甘いもなかの苦心談　同

友の愛人逝く

さびしくも見せし寫眞は微笑めり　同
純文學といふを讀んでる暇の無く　同
純情なかたがお神酒で赫くなり　東京　山田宙望
犬抱いて男のやうな膝頭　同
紙幣の皺こゝは樺太山の中　同
儲かつた主人の電話甘たるい　同
君が代へモンペイ襟をかき合せ　名古屋　八幡勿來
話す事多し少女等草に座す　同
もつてある土へ子供は穴をあけ　同
夢はおかし母が隣りの人だつた　同
ねぢ一つ拔けてる樣に笑ひ出し　岡山　生子洋子
喧嘩する氣で飛んで來た息づかひ　同
夕燒を讃めつゝ道は下り坂　同
强情もいいなと思ふ人が居り　同
反目の二人が狹い路で會ひ　大阪　和久双葉
傷兵へ隣の人が先きに立ち　同
買つて來てやつた玩具を恐がつた　同
損得のない人達のむごい評　同
注射など獨りやります痩せてます　廣島縣竹原町　西野みづほ
炙すえながら火葬の熱さなど想ふ　同
人間も驚いたが蛇も又驚いた　同
それとなく諭す話を怨まれる　大阪　桝岡詩朗
統制の波にをされた艶なき手　同
轉業の形にはまらぬてつきなり　同
轉業をした日の朝が晴て居り　岐阜　藤井八路
隣組垣を繕ふいゝ天氣　同
白痴の兒「天に代りて」だけ唱ひ　同
子を探す姿ある日の紙芝居　大阪　浪玲之助
割箸に過去を見つけた折れ具合　同
斯うしては居れず斯うして居る下宿　同
國寶の建築物と知らぬ鳩　廣島　大山露斗
日本はせまねと思ふ若さなり　同
四十のさて〳〵一人子がほしし　同
緊急な事が濟んでる廻覽板　大阪　石田沐天
㊙も皆んな辭書には無いテンポ　同
木炭車車庫は火事場のよう煙り　同

病中吟（三句）

病院へ來れば不幸な連れもあり　和歌山　秋月宏方
待たるゝは働いて食ふ飯の味　同
見舞客米の話もして歸り　同

叔父の死去（三句）

話みなつきて線香ばかし替へ　島根縣　石丸順子
血緣は薄し火葬を主張する　同
通夜のお茶冷たくなつて捨てられる　同
持つて出て持つて歸つた荷の重さ　岡山　岡眞理子
ふりやまぬ雨早春の美を感じ　同

大阪の姉を尋ねて

姉妹話しつかれた灯をともし　同
月給は同じ人間怖くなり　ハワイ　長谷川猿吉
後添へは話好きです髮を撫で　同
取つた丈で足らぬ娘のお小使ひ　同
卒業へもう大陸の物價など　布施　岩本晴美
親善の意氣で支那語の夜學生　同
戰陣訓錆びた銃劍摯りません　同
色街で尼僧舞妓にしたしまれ　岐阜　市川童顏
炭つゝき〳〵女の長話　同
まだ一機還らず基地は夕ぐれる　同
子のなき夫婦へ鶯が鳴く　大阪　富岡巨人
生死不明へ俄か信心　同
やゝあつて返事をしたはどもりの子　同
皆傳になつて近づくお嫁入　大阪　後藤生甫
山櫻生けて日本の家となり　同
外米へ感謝教へる兒のしつけ　廣島縣竹原町　梶川芳郎
南進の拓士になつて米屋ゆく　同
猿芝居帽子の嫌な役もある　堺　和泉九平
この方向に見えました火事見舞　同
處女の香を殘して立ちぬティルーム　京都　馬場理公
一列に並べぬ大人ばかり居る　同
半分は身振できかす浪花節　大阪　中西彌生

と云ふものは、我々が到底之を眞似し得ない堂々板についた感心すべき？態度である事である。

日系の潔癖手鼻叱つてる

然し相手が縣長ともなれば、只無暗と叱る譯にもいかないし、寒い冬が去つて時候が段々春めいて來ると、餘り此の手鼻をかむ姿を見受けくなる。

○

小份子錢（シャウブンセンズ）と云ふ言葉がある。これは嫁さんの臍繰り金とも云ふべき性質のものである。但し我が國の所謂臍繰りと異る點も多く、(一)嫁が實家から持つて來た金であつて、しかも普通嫁さんは(二)此金の利殖をはかる爲、他人に貸して利子を取つてゐるが、ひどいのになると、其家に對し、之を行つて居るのがある。尙稀には(三)此小份子で土地を所有して居て、他人に或は實家に之を貸付け、小作料を取つて居るのがある。そうした金の使途としては(四)色々擧げられるけれども、最も注意すべきは、女の子の敎育は、此金を以てすべきものとされてゐる事である。(五)斯して夫は、妻の小份子の額、管理方法、使途等に關して全然與り知らず、然も之を以て、當然の事とされて居る。

この樣に小份子は、はるかに臍繰りの尖端をきつて居て、然

★★★ ★★★

手ほどきの碁お茶が出る菓子が出る　大阪　橋本美奈子
理路整然だが間の抜けてゐる女　同　平井龍川
湯上りの我が手琴でもひきたい手　大阪　森日出坊
不幸者處女で歸れる筈はなし　同
胸に詫び夜半の旗を入れにゆく　大阪　奥田絲翠
アパートの屋上でする隣組　尼崎
此の胸を廻覽板で知らせたい　同
花道へどや〳〵ときて斬られてる　尼崎　櫛部八櫻
眼帶へ日本はありがたき御沙汰あり　大阪　藤森小雅子
評論家遠慮をせずに罵しつた　同
征くとこだ護るところだ海と空　尼崎　櫛部八櫻
隣組組長さんに金があり　同
欠勤の朝を愛國歌が流れ　布施　小谷華素兒
違つてもいゝと元氣に答へさせ　同
理窟なら主任に言へと女店員　大阪　加藤ライト
汽車電車自動車疊よくいたみ　同
お骨揚げ金歯一應聞いて見る　大阪　佐野牛歩
常會で言へぬ事あり家主居て　同
早合點ばかりして居る若夫婦　島根　田中弘樓
其の當時奮闘しました寫眞帳　同
常會の申合せの神詣で　大阪　高田九柳
コウモリの如しと影の噂する　同
嫁ぐ妓は酢蛸の味も知つてゐる　尼崎　江口正路
常會へなくてはならぬうるさ型　同
吊革に作法が欲しいお嬢さん　大阪　南要兒
私服だが君より星は多いなり　同
古い街だけにポストが赤すぎる　德島縣鳴島町　矢田壽澄
掃除デー課長上衣を脱ぐ書棚　同
國旗台戰陣訓がこだまして　大阪　有馬千斗
外交に慣れて名物振向かず　同
洗面所大きな音のする所　大牟田　高田抱逸
有餘る人に當つた五千圓　同
社の者が競つて所長に傘を借し　大阪　戸奈巳之介
親類へお泊りで行く米を提げ　同　杉原愛鳩
商人訓まだオツサンは讀まんのか　廣島縣竹原町
節米の認識不足兒が教へ　同　九島利生
金があるから贅澤がやめられず
人間の悲しさ今日もよく喋り　大阪

喰べながら何か目論む淋しさよ　敦賀　岩井迷路
じやが芋を植える決議に贊成し　同
振り上げた鍬のむかふにかすむ富士　大阪　松村茂路
友逝くか新體制の華も見ず　同
想ひ出を乳房の下に抱いて嫁し　廣島　福原魔美
人事課のおしのきかない人不足　同
全快の春へ魚釣り少し燒け　兵庫縣室津港　木村染史
病上りさて看護婦が忘られず　神戸　宮永燦柳
滿員をじらして老婆二人降り　同
李香蘭團服連をいらだたせ　長野縣上山田　湯浅小城子
年長へ仕事の多い隣組　大阪　佐二木千隈
泣けそうな感謝歸還の通過驛　布施　武部香林坊
慰められたい氣持そのまゝ友を訪ひ　名古屋　上田翠光
告知板來ましたけれど歸へります　松本　松井靜子
商店法夜勤歸りも一寸淋し　下關　國弘半休
失戀はこんな娘にしてしまひ　大阪　西藤義春
今日も亦起重機任せの仕事なり　大阪　濱本みのる
貰ひ子のこの子どこまでひねくれる　大阪　古川鶴聲
鋏引に強く不幸は續くなり　山口縣小野田町　岩崎松翁
初めての昇給子供幼稚園　尼崎　飯尾奇與史
銀幕に今太平洋荒れてゐる　大阪　松永青雲
繪本買ふ丈けの夜店を子と歩き　松江　石原詩朗
アメリカの馬鹿さ加減は世界一　大阪　朝野久人
破れ傘貸して頂く勝手口　大阪　保田呆人
事務机春の埃が來てたまり　大阪　松浦帆船
開拓士夢は世界をかけ廻り　松江　松崎專太郎
人一倍の氣高さ姉の無口に見　松江　水谷夢生
シーズンへウキンド早くから飾り　島根縣石見町　伊藤秀坊
その若さだけ惜しまれる未亡人　松江　吉岡笑々
御堂筋戀の舗道になつて暮れ　廣島縣竹原町　黒本芳泉
男手にミルクといてる不倖　大阪　津路紅多呂
戸の音を氣にして這入る見舞客　新義州　高木滿山
配給の酒を親子で讓り合ひ　岡山縣玉島町　津田耕水
動いてるあいだ息子へ氣は折れず　堺　野島神樂
おちぶれてした轉宅へ祝が來　大阪　堀毛一龜
食べさして貰つて理想もつてゐる　大阪　谷口寒草
かたみ兒へ玩具の殖えた五十日　大阪　山本葉光
　　鈴木石鹿

も餘りに徹底しすぎ、家族制度統一の、癌ともなつてゐる。滿洲の慣習中、一考を要すべき事の隨一に、數へられてゐるのも、宜なりと云へよう。

小份子義理人情を欠いてゐへ

○

娯樂機關もなく、何等の慰安設備もない、滿洲の田舍に生活する日本人にとつて、毎日の仕事の餘暇に、殊に日曜日等、ラヂオを聽くのが最も樂しみである。麻雀、圍碁、將棋等の如きは、或る限られた一部日系の娯樂たるにすぎぬ。ところが現在滿洲の田舍に於て、（少なくともラヂオに依つて樂しむ時を得ようとする程の）晝間電氣の來るところは、殆どない。

多くは夜間線のみである。そして夜間と云つても夏等は、午後九時頃になつて漸くうす暗くなつて來て、電燈がつくのであるから、凡そみじめなものである。

○

幾回目かの内地歸國の際、丁度身體の調子を惡くしてゐたので、一等に乘つた事がある。

いつもは二等にばかり乘つて、汽車の一等には實のところ始めてだつた。そして安東、釜山の各税關に於ける、所持品檢査等も、思ひなしか幾分叮重に扱はれたように感じられた。

愚談 田舍の暦

小畑自由朗

職員會議

ライオンが錦蛇に締上げられてくた〳〵になる猛獸映畫を、町で見て來た子供と、見て居ない子供の間に、「ライオン斷じて百獸の王ならずと否定する者と「否、本に書いてある以上」と其れを肯定せぬ者と、全校兒童が二派に分れて、物情騷然たる事態になつて、先生達を吃驚させた。

そこで、緊急職員會議が開かれ、生徒達には絶對内密で、先生一同打揃つて、町の活動小屋へ出かけて行くことに成つた。

愛國心

こんど他の縣から轉任して來た先生は、顔が蔣介石に似て居るといふだけで、全校生徒に氣受けが悪かつた。

小說以上

「國を出てからのわてェは、まるで新派悲劇の小說だした」と約三十年振りに、お墓まいりに歸鄕したおしろいやけのおばはんの身の上話をきいて見ると男倖せが悪くて、十數人の聟はんを交代せしめねばならなかつたと云ふ、なが い〳〵物語であつた。

マンマンデ

仁王さんの、どちらさまが御夫人で、どちらさまが御主人であるか、今だにそれにこだわつて、彼は代用教員である。

ふらち者

「學成難ク、親タリ易シ」と、無禮講の宴會で朗吟して「時局ちゆうもんわきまへんかい」と年兒々々々の村長さんに、小つびどく叱りとばされたと、若い戸籍吏君が消化て居た。

大問題

我村の生める唯一の傑物である代議士樣を、はるばる東京からお迎えして、この度竣成した村青年修養道場の落成式に御臨席を願ひ、御高話を拜聽し、尙其上道場を飾るに「粉身報國」の御執筆まで賜つて、村民一同感激おくあたはざる有樣だつた。

其れから四五日目、其の代議士樣が暗取引でやつつけられた新聞が、村をけん〳〵ごう〳〵とさした。

てきめん

辻の曲り角になつて居る自分の家の板塀へ、學校通ひの子供を始めとして、通りかゝりの人達が小便を引つかけて仕樣がないので、朱塗りの鳥居さんを張りつけやうとすると、「勿體ないことを」と、母親が承知しないので、「此の處云々可らず云々、嚴罰に處す可し」の札を立てたがとんときゝめがないので思ひ切つて「駐在所」と書き入れると、てきめんにきゝめがあらはれたが、早速、駐在所から「一寸來い」とお達しがあつた。

役者が一枚上

自分の家の前を日に往復六つべんづつ必ず通る乘合バス奴が道をめちゃ〳〵にぶつこわして平氣で居るので、再三會社へ斷じ込んだが、とんと埒があかないのに業を煮やしたおつさんが三日がかりで川からバラスを引き上げて修繕して、通りかゝる乘合の前に大手を擴げて、「此處だけ宙を飛びさらせい」と怒鳴りつけると、「勝手にバラスを川から上げたのを警察へバラしたる」と、あべこべに運轉手に怒鳴りつけられた。

ニュース

こんど町へ來たニュウス映畫に、我村出身の特務兵豆腐屋の杢さんが、堂々たる進軍の勇姿を現はすと云ふので、村中こぞつて、杢さんの母親を連れて、野を越へ山を越え川を渡つて町の活動寫眞小屋へ殺到した。

連戰連勝進軍々々の勇ましいニュースに、一同が緊張し續けて居ると、軍車に何かを滿載して、馬の口づなを取つて進軍する特務兵の一隊が現れて、畫面が一轉すると、俄然！杢さんの姿が現れた。而も泥濘の嶮岨に、杢さんは脛を沒し、馬はあへぎ、車は沈んでゆく、杢さんの必至に打ち振る手づなに馬はます〳〵狂ひ、泥濘は地雷のやうに跳ね上つて、馬も車も杢さんも亞修羅の樣な泥人形「杢さんッ！」一同は熱狂した。「俄張れッ！」一同は總立ちに成つた。「杢ッ！」母親は轟く一同の間をかき分けて、「もう一息、もう一息ぢやぞい」と、血を吐く樣な聲を絞り乍らスクリーンへせまつて行つた。

扁桃腺炎

●觀血的處置に依らざる獨自の內服短期療法が遂に確立した！

アルバジルは單に內服に依り血液中に滲透し、直接病原菌に作用を營むを以て、自覺症狀の急速なる消退は勿論、治療は根源的且つ迅速である！

★但壓三錠・百錠（藥店に有り）

中耳炎
扁桃腺炎
齒槽膿瘍
トラホーム
急・慢性淋疾
婦人科疾患

アルバジル錠

A162 東京 山之內藥品商會 大阪

月評 川柳一ト筋

路郎・丹路・鋭々
某人・白柳子・亞鈍

路郎＝今月の月評句は誰々の提出としないで、先づ（近作柳樽）から、

小ぼけな慾へ二十坪が建ち　横山勝二

の句を批評することにした。

亞鈍＝この句なんか、うまい句と言ふのでせうネ。

路郎＝生活表現の句として面白いと思ふ。二十坪を詠んだのがヤマだネ。表現上の技巧は左程でもないが、摑んでゐる點は買はねばならぬ。年を取つた人でないと言へない句だ。

亞鈍＝僕はこの句の內容が喰ひ足りない氣がする。內容が喰ひ足りないといふよりは、川柳的表現の安易さに便乘して、それにつれて內容にも安易さがあると思ふ。

某人＝確に安易に作つてゐるといふ感じはある。これで「二十坪」と云ふのが、別に「二十坪」でなければならぬと考へ拔いたあげくの「二十坪とはうけとりにくい。

路郎＝かなり的確に摑んでゐると思ふ。

亞鈍＝句を作るのに少くとも一くぎりは考へてゐるところがある。

某人＝內容的にか？　表現的にか？

亞鈍＝表現的にだね。「小ぼけな慾へ」で、そこで一邊考へてゐる樣に思ふね。それから若しこの作者が「二十坪」と云ふその土地を自分が握つてゐて、「二十坪が建ち」と云ふ言葉が先に句の上で考へ出されたものならば、「小ぼけな慾へ」と出る冒頭の句語に考へを及ぼしてゐる樣に思ふがナア——。

某人＝一體この句の焦點は、「小ぼけな慾」か「二十坪」か何方だと思ふ。

亞鈍＝可笑しな質問出しよつたな——。（笑）

某人＝つまり、僕の言ひたい事は「小ぼけな慾」と云ふものを象徵するために「二十坪」を持つて來たのか、「二十坪」を自嗚せんために「小ぼけな」と出たのか、その邊の重點が判らない。勿論、こふ云つた二つのもので兩々相助け合うて、鐘が鳴るのか撞木が鳴るのかと云ふ境地もある句なれば疑問も起らないが——。

路郎＝これは斯う解釋すべきだと思ふ。僅に二十坪位の家が建つてゐるのを見て、——何んだ、小ぼけな慾だなあと考へるが、その二十坪の家すらも建て得ないと云ふ人達の事を詠んだ句だと思ふ。大體二十坪位の家を建てゝ住むと云ふ人達を想像すれば、十二三坪位の借家住ひをしてゐたサラリーマンか、小金を溜めた人達であらう。それで二十坪の家を建てゝやれ〳〵と云ふ氣分になつた。それを見て、人間と云ふものは小さな慾望しか持てないものだなあと感じたのが、この作者の句だ。

亞鈍＝「小ぼけな慾」ですネこれ、慾の大きい小さいと云つた意味の「小ぼけ」か或はけち〳〵した慾でと考へてみては如何でせう？

路郎＝それは、大きい小さいの意だね。

亞鈍＝そうすると、「慾へ」の「へ」が問題になると思ふ。

某人＝川柳的な使ひ方なら、先づ仕方がないと思ふね。只そういふ川柳的な使ひ方のために何處でもそれを使つて云ふ、そう云ふ處を作者は知るや知らずやは別として、身をかくしてゐる。そんな事がこの句に限らずあると思ふ。これは喋り出すと川柳的用語法といふか。それは一寸やそつとでは埒があかないから言はないが一考を要すると思ふ。で亞鈍君の質問はそれで打切りとして、僕は先生の今の解釋をそのまゝうけとるためには、も少し鋭いものか、きつぱりしたものがほしいと思ふ。先生の

一萬圓フフンと言つて草に寢る

あれ位の氣魄がほしいと思ふ。

亞鈍＝氣魄もなんだけどね。それは皆先生みたいになれといふ事であつて、作者の性格によつてはこれ位の氣魄しか持てないとすれば、それも仕方がない事なんだ。

某人＝それもそう——。

亞鈍＝今、君が云つた先生の「一萬圓フフンと云つて草に寢る」の句にはこれと同じ樣な內容を持つてゐるが、表現は全然違ふネ。と云ふ事は「小ぼけな慾」といふお客さまへ、はいどうぞと云はん許りに、「二十坪」の座蒲團を持つて行つた樣にこの句は平凡なんだ。

某人＝手輕な感じ……。つまりね、僕はその「二十坪」の座蒲團（と某人うつかりつられて筆者へ）いや、その座蒲團は退かして貰ひます。（笑聲）——の內容がね、「小ぼけな慾」「二十坪」とこれ丈のものを作者が見て、それ丈のものをまた吐き出した、それに對して先生の「一萬圓……」の句は素材を一度消化してしまつて純粹の自分のものとして句を吐かれた。こういふ處に二つの句の相違があるんじやないかと思ふ。素材の面白さ丈に賴らずに素材を消化してしまつて自分でなければ云へない樣なカラーなり氣魄を持たせる、これが作家の充分努力すべき點だと思ふ。

亞鈍＝それを、簡單に僕が云つてみようか。それは僕の川柳詩論のわけ方で、主情の句と客觀の句との違ひになるんだ。

救急車はたして春の罪なるや　山田宙望

亞鈍＝この句なんか悪くはないねえ。

丹路＝僕はこの句はよく判らないんですが「春」と云ふ言葉に何等かの意味を持たしてゐるに違ひないのでせうが、それを觀賞者の中に任して、自分は一應かくれてしまつてゐる。その邊で敍法の點に安易と思はれるし、内容に於ても、も一つ迫つて來るものがない樣に思ふ。

某人＝この春といふ言葉を、そう言ふ象徴的なものと考へないで、氣節の春と見て「春の罪」と云ふ事は、春のせい位に考へたら判つて來るんじやないですか。

路郎＝今判り難いと云ふ説が出たが僕は寧ろ判り過ぎる句だと思つてゐる。その判り過ぎた句を表現の力で生かしてゐるのだと思ふ。

亞鈍＝同感ですネ。僕も先生の仰言つた通りに解釋します。それは「春の罪」と云ふ言葉——具體的な事件がはいるとすれば——先の「小ぼけな」の句と同じ樣に表現が平凡になつちまふ。それを「春の罪」とぱつと出した丈に句意の擴がりがあつて面白い。「春のせい」とすれば丹路君の云つた風に、漠然としたものになるが「春の罪」と出したので僕ははつきりしてゐると思ふのだが。

某人＝それは勿論僕の云つた春のせいと云ふのは、極く大ざつぱに譯してみた丈で「春の罪」と云ふ言葉の表現上の價値は疑はない。では何故そんな飜譯を試みたかと云ふと、丹路氏は判り過ぎる句の背後に何かを搜そうとして、却つて判らなく自分でしてしまつたかと思つたから。

（この時、鋭々氏出席）

丹路＝輕い意味に考へても、「はたして春の罪なるや」これは氣節の罪でなしに何かあると思うが、その主張が判らない。

路郎＝假に春は事故が多い、——その事故があるのは春の罪か？　と云ふ處に疑問を投げてゐるのだ。

清貧の彼れ漬物の味をほめ　友田雨眠

某人＝一寸批評しにくいな。

亞鈍＝何と云ふたらよいかナア。

某人＝これは批評と違ふけどこの「彼」に「れ」がひつついてゐるのは、僕は極端に言うと一寸うんざりしてしまふ。（笑聲）亞鈍君何ともないか？　ハツハツハお鉢を廻してやつた。（笑）

亞鈍＝勿論、この「彼」の「れ」は餘計なものだな。「彼」を本字にせず平假名でやつた方が、この場合活字にあらはれた視覺の上から云つていゝ樣に思ふ。それから、僕も先刻から何か云ふ可きものをと探してゐたんだが矢張り「彼れ」で思ひめぐらしてゐるんだが、「清貧の彼れ」と詠むか、或は「清貧の」「彼れ漬物の」と詠むか、これはまあ披講する場合の詠み方を考へてゐたんだ。勿論「清貧の彼れ」と上五にひつゝけて詠むべきでせうネエ。先生。

路郎＝「清貧の彼れ」と詠むべきですね。彼の「れ」がひつゝいて可笑しいと云ふ説は、本當に文字について苦しんでゐる人達からみれば尤もな話であるが、大體從來の文典から云へば名詞に送り假名はしない事になつてゐるが、近來の新聞等では送り假名の混亂時代を來して、こうした名詞に送り假名を使つてゐるので、この場合の「れ」もその意味から寛容されていゝだらうと思ふ。この句は他所事の樣に詠んでゐるけれ共、作者自身を詠んだものとしてうけとれる句である。美食しないで常に漬物を味つてゐる中に、おのずと漬物に對する感賞力が出來て、人と會食してゐても、うつかり漬物の味をほめると云ふ樣な人の心境が思はれる句である。

（この時、白柳子氏出席）

亞鈍＝先生の作者を知られての御批評はよく判りますが、然し作者を知らないでこの句を詠む讀者としての僕の感じから云へば、貧しければ漬物に飽いてその味を嫌ふべき筈のものですネ。それを漬物の味をほめると云つたのでは、餘りにその貧しさに順應してゐる氣分がする。云ひかへれば、自分は貧しいから常に漬物許り喰べてゐますと云ふ丈の事で、判り過ぎた句になるんです。

日記の中の傷だらけの僕　星伽龍路

某人＝丹路さん張りですネ、これは丹路さんに聞きませう。

丹路＝これは一應自分の言ひたい事を言ひ切つてしまつてゐる。その點で純粹にうけとられるんですが……。

某人＝少し、露骨な氣がするんですが、と云つて一寸手の入れ樣のない句でもあると思ふ。

亞鈍＝手の入れ樣がないとは表現上にかネ。

某人＝僕の感じる露骨さを消そうとするとこの句の持つてゐるアクセントが消へてしまつて案外何でもない句におちぶれると云ふ恐れがあると云ふ事なんだ。言ひかへると、僕が感じる露骨さがこの句の中心になつて効果づけてゐるとも云へる。

丹路＝その露骨と云ふのは自分を「傷だらけ」と云ひ切つてしまつた點にあるので、それはよく判るんだけど、これからの川柳精神と云ふか、川柳作句態度に於てこう云ふ内省的な方向に作者が嚴しく自分を見てゆこうとする態度を買ひたいと思ふ。

亞鈍＝そこだね。僕も同感。

路郎＝この句は内容から云ふとそれ程露骨ではないが、露骨な樣に感じさせるのは表現形式が短句（七七）の形式に依つてゐるためであると思ふ。從來の短句の名詞止めはその内容の表現を硬化させる場合が多いのでそれがこの句の内容を露骨かの如くに響かせたのである。本當の内容の露骨と云ふ意味から云へば、「傷だらけの」と云ふ抽象的な事でなく具體的な露骨さ

があらはれてこなければならないと思ふ。

某人＝僕が露骨と云つた事は二つのものがあつて、表現上の露骨さは先刻云つた樣に一面の効果を及ぼしてゐるが、「傷だらけの僕」と云ふ言葉から自己嗜虐的なものを感じさせるその點で露骨と感じたんです

亞鈍＝露骨もくそも、そんな事はどうでもいゝじやないか。

某人＝サア、ひつくり返したぞ。

亞鈍＝（續けて）こりや、丹路君が云つた事と先生の云つた事とを合はした丈の意味合ひの句なり句の價値とみたらそれ丈でいゝじやないか。

某人＝それは勿論、僕の云つた事を以つて、この句を傷だらけにしようとは思はない。

鋭々＝觀念的だね。

せんだくのはたちのころのあさきいろ

水谷鮎美

丹路＝「あさきいろ」と云ふのがせんたくの色か二十歳の頃のどちらでせう？

鋭々＝はたちのころと云ふところから後の意でせう。

某人＝この句は、まあ氣どりの句ですね。

亞鈍＝僕は判らない句と云つてしまおう。

鋭々＝結局、判つた樣な判らん句だね。

白柳子＝私にははつきり判ります。感覺的川柳で……。この句の中から具體的なものを探そうとするのが無理ですな。

某人＝この句は、結局鮎美氏の「いろあひ」で「あさきいろ」を眺めたらそれで充分だと思ふ。

路郎＝鮎美君には時々こんな句があるんだが、分析して考へれば、「せんだく」してゐるのは男か女か？　勿論この句を見てゐると女の匂ひがどつかにするのである。ところではたち近い女の洗濯と云ふ事になると、その「せんだく」してゐる品は決して、「あさきいろ」でなくむしろ、濃厚な色であるが、作者はその洗濯物からうけた濃厚な感じを詠んだのではなくて、女としての、生娘、それがもたらす情緒と云ふ事に「あさきいろ」を感じたのであらうと思ふ

某人＝洗濯物が「あさきいろ」でなしに鮎美氏が「あさきいろ」ですね。

（銑人筆記）

樂しく
國民學校へ

いよ〳〵國民學校としての新學年が
初まります。樂しく樂しい御入學に、御進
級に、是非必要な品々を各種取揃へました

通學服・文房具・ランドセル（四階）
机・書棚（六階）　通學靴（二階）

大阪・高麗橋
三越
休定曜月

碁・熊・にしん

福田山雨樓

このごろチヨボチヨボの相手が出來て、ザル碁に夢中になつてゐる自分は、北海道旅行中案内して頂いたS君が仲々の打ち手なので、いゝ勉強をさせて貰つた。どの位置いたらよいかわからなかつたが、自分の勘で七目置いたところ恰度それがいゝところであつた。そのS君からゆくりなくも中央における日本棋院のことや、本因坊繼承問題昇段問題等の内幕をすつかり聞かされた。東京の眞相が東京にゐてはわからぬ一例。

○

四人で旅行中、山の中で車座になつて晝飯を食つてゐたんです。するとその中の一人が熊のやつて來るのを逸早く見付けたのです。兩側の二人もすぐその氣配に感づいて三人はだまつてこそ〳〵逃げて行つたんです。大きな聲を立てゝ騒ぐとみんなが危いものだからお互に無言で逃げのびたのです。可愛想なのは殘つた一人です。熊が背後からやつて來るのに氣付かずぼんやりしてゐて逃げる機會を失してしまつたのです。いよ〳〵熊が近づいて來ました。件の男はウーンとのけぞつてそこへ氣絶してしまひました。すると熊は何思ひけん男を飛び越してそのまゝ行つてしまひました。程經て逃げた三人がこわ〴〵現場に引返して見ると、殘つた男はかすり傷一つ負はずのびてゐました。やがて眼を覺ましたので四人は無事を祝し合つたと云ふ話。なまじつか騒ぎ立てると誰かがやられてゐたかもしれないが、不人情のやうだが默つて逃げたのが却つていゝ結果になつたわけ。こんな風だと昔小學校の讀本にあつた熊と二人の友達の話などは差し詰訂正を要することであらう。

○

『にしんの子ですね、とてもうまいんですよ。小さな奴を買ふとちやんとその子をつけたまゝ呉れるんですがね、大きな奴になると子だけは取つちやつてるんですよ』

江戸ッ子育ちのT君は歯切れよく話して笑はすのであつた。

花花供生造裝
環籠花花花飾
フロリスト
紅
くれない
大阪市西區京町堀通り三丁目
電話土佐堀五一三〇番

同舟近詠

怒り飛ばしたあとの靜けさ　金澤　安川久留美

雜草の土をふるへば虫が生き

動脈硬化煙突の字のビール見る

神へ水佛へめしも七分搗

針箱の塗りの手づれも四十年　松山　前田五健

どこも行く學校がない子の瞳

生字引コヨリで綴ぢたものを出し

師の恩も思ひ月謝も又た思ひ

花賣りに風流はなし錢數へ

洋樂と洋食が好き嫁き遲れ

春の空此の果てに國戰へる

知是安分滿天の星ありがたし

子を連れた遍路蝶々へ休みもし

其中で頭下げぬは寫眞班　神戸　潮田明坊

回覽板いゝ筆筋だなと思ひ

風呂數にまとめて傷病兵の旅

闇取を知らぬ家庭に酒が來ず

子に入れ拔いた水涕をかむ　長野縣須坂町　高峰柳兒

廢物利用へ凝つてる閑があり

官報を借りて小商人また迷ひ

徐ろに轉業對策炬燒に居　大和郡田町　嶋田翠峯

新體制うちの主人は舊體制

金借りに行くにも妻は日を撰び　名古屋　鈴木可香

遺兒或日閣下に椅子をすゝめられ

子心に知られたくない母の職

かくも先輩は有難く世話をやき

釦貝

★

人某田岡

本當の友達といふのは、何年逢はなくつても氣にならないし、逢つたら逢つたで前通りだし、どつちも別々に話したり、歩いたりしながら氣をつかはない。そんなのがそうであらう。

※

戀愛とはあだかも箸のついてないお膳のやうなものである。不作法にやれば口に入るが、お行儀よくしてゐたのでは何時までたつてもたべられない。

※

立木。一本一本はてんでんばらばらだが、遠くから眺めると一應は風景になつてゐる。世間。

※

羞恥心。女のもののやうに云はれてゐるが、これはどうやら嘘らしい。老年、年増は云はずもがな、としごろの女にさへ無い。違ふと思ふなら、髪型、化粧、キモノの柄、などへの、無鐵砲といつていゝ取つ付き工合など見てみるがいゝ。斯うなると「花恥しき」なんて言葉は全然意味をなさなくなるし、昔の人も案外あてにならんといふことにもなり相だ。

※

感情家が冷く見える理由。押へよう押へようとする努力一ぱいで、その方が目立つてしまふのである。

※

監督者の留守の時の方がずぼらのしにくい氣持。まあ考へてみれば莫迦々々しいやうなものゝ、この氣持ちが捨て切れないから、いまだに詩だとか美だとかが頭を離れないんだ。

※

廣壯なる邸宅。

九尺二間。

だがまあ住んでみれば案外平氣なものさ。どちらも。

※

水がうまいと思ふ日。これは危險な日である。こんな日にこそ出家遁世のチャンスがある。

※

だましもせず、だまされもせず。一體何のために生きてゐるのだらう。

※

だましたり、だまされたり。

——これも一種の隣り組か。

※

探險映畫の土人の生活を見て文明への讃美を感じる前に、似たりよつたりだといふ氣になるのは僕だけか。

※

最も完全なる自殺法。——生きてゐるべし。

※

詩人とは……

※

そら豆をむきながらチモール島を論じ、鯛のさしみをはさみながら女の話をする。

どちらも鬱とうしい。

※

古びたる服

古びたる心。

古びたるは

服か心か。

※

青竹は眠れません。

節のあひだに

月をみごもつてゐる。

※

何を食つてもまづい。何を讀んでもつまらない。そんな時にかぎつて、何か食ひたくつて、讀みたくつて仕方がない。

※

理屈はどんなにでもつく。そこに理論の指導的な混亂がある。

※

わるびれざれば惡も美し。

※

嚏の出そうになるやうな日向。

——完——

ドクトル・ツアヘルトと語る

——ドイツへ紹介されてゐた川柳——

阿部佐保蘭

松本の石曾根民郎君の家で

だしぬけに鐘が鳴るのも旅のこと

路郎

の横額を眺め乍ら、今から八年前朝田新水君の案内で訪ねたキング居に於ける路郎先生の情熱的な眼鏡の中の瞳を思ひ出し、大阪へも暫く行かないなあ、一度行きたいものだなあとひとり考へてゐた。ふと現實に返つた僕はかねて松本へ來たら一度逢つてみたいと思つてゐた松本高校ドイツ語講師ハーバート・ツアヘルト博士に逢ひたくなり、炬燵の向ふの民郎君にその話をしたら、電話で聞いてあげませうといふので待つてゐたら、丁度都合がよいとのことそこで雪の降る中をタクシーを呼びとめて松本高校官舍のツアヘルト博士の家まで急がせ、そのベルを押した。晝食が終つたらしい博士に案内されて明るい應接室に通された。德富蘇峰氏が博士の爲に書いてあげられた横額に芭蕉のものらしい掛軸、その前に恐らくドイツ人の奥さんが生けられたらしい蕚蘭、幸田露伴氏の筆になる短册等さすがハンブルグ大學でフローレンツ博士の指導の下に續日本紀の宣命の研究で博士號をとられて來朝された方の部屋丈あるわいと嬉しい氣持になつた。

話を聞いてみると現在佐々木信綱博士と協力して萬葉集のドイツ語釋をやつて居られる由。俳句川柳とどちらが難しいですかと訊ねたら、矢張俳句川柳の方が譯しよいと云つて居られた現在萬葉集の獨譯と共にやつてゐる日本文學史のドイツ紹介が川柳の處へ來たらその參考書の蒐集等でその助力を求めて居られた。この前に川柳を研究しやうとして東京と名古屋と大阪のとりつけの書店に頼んだが遂にその書を求めることが出來なかつたと云つて居られた。柳樽名句の完全な解釋、川柳三代集の名句の解釋、川柳の完全な歴史の本等がもうそろ〳〵出て來てもいゝんぢやないかと獨り考へてゐた。

松本で今朝硯を借りて認めた

自作の川柳短冊二枚

御勅題 漁村の曙

海を出る初日へ祈る兵の幸　佐保蘭

初冨士へなびく日獨伊の國旗　同

をおちかづきにあげた處大變喜ばれ、川柳ではあなたが始めてですといつて、文壇詩壇の一流人に書いて貰はれた短冊帖に丁寧にしまはれたのには却つて恐縮した。

俳句川柳の獨譯に當つて博士は五七五式に譯するのが最上と知り、そういふ風に譯して居られる由、意譯だと散文又は小說の題と間違へられる由、僕もその五七五式の譯し方に說明文を附加する方法に贊意を表して置いた。

博士はベルリン生れでその流暢な日本語でベルリン子は丁度日本の江戸つ子に大變よく似てゐて、例へば旅行して知らない處へ行つても知つてゐるふりをしてよく失敗する。失敗しても後悔しない點お國の彌次喜多みたいです。だから江戸つ子の氣持ベルリン子に解ると仲々通なところを見せられる。

高濱虛子氏に逢つた時萬葉集には愛の句があるが俳句にはないことを質問したら、俳句ではあまり愛の句を詠まないとの返事だつた由、僕は嘗てきやり誌上で「川柳の持つ愛と自由の世界」と題してツアヘルト氏に手紙形式の一文を草したのでこゝでは重複を避け、僕が萬葉集や源氏物語のやうに現代の日本人にさへ註釋なしでは解らないものより、川柳のやうに外人にも解り易いものを知らせる方が日本人も十德を冠りむづかしい顏をした人間ばかりでなく、ユーモアも解する明朗な人種たることを了解され、日本に親しみを持たせるのに一番よいのではないかといふ意見を出した處その通り〳〵と贊意を表して居られた。

フローレンツ博士著の日本文學史（Karl Florenz: Geschichte der japanischen Literatur 477—479頁）を書齋から出して來られて、その中からドイツ語に譯された左の川柳をピックアップして話された。

Vernehmend, das Begräbnis
Finde in Tambo statt.
Geht der Vater selbst.

とむらひは田甫と訊いて親爺行き　古川柳

Den Totennamen(des Vaters)
Vergass der Tropf und betet:
"Bratias, Alter!"

大間抜戒名忘れ南舞親爺　古川柳

Ein Bonzenkahlkopf wurde
Und setzte zur Ruhe sich
Der Palmreisbesen.

坊主になつて隱居する棕櫚箒　古川柳

Im häufigen Besuch der
"Inselheide"
Ist selbst "Muscheleheide"
Unhygienisch.

島原通ひ貝原も不養生　古川柳

Der Parasit-
Bei der dritten Schale Reis
Reicht er die Schale schnich
tern hin(zum Füllen).

居候三杯目にはそつと出し　古川柳

氏トルヘアツ・ルトクド

奥樣の手製のケーキを御馳走になり暖かいコーヒーミルクに川柳を通して舊知の如き二人の間に話がつづく。

博士は又狂歌の代表的な句を求めてゐるが、未だ見つからないとの話に僕が小學校の讀本で習つた左の狂歌

さわらびが握り拳を振りあげて　山の横ぢら春風ぞ吹く

Die auf dem Grabstein
Rote fromme Frau ist
Wieder schwanger geworden.

石塔の赤い信女が又孕み　古川柳

僕がこれ等の古川柳が私達からみた時所謂名句の外の句であつて、川柳にはもつと〳〵いゝ句があり、それ等の句を是非紹介して貰ひたいことを話すと、その時機が來たら手紙しますから是非共御援助下さいとのことであつた。

を手眞似も入れて解說すれば、それはいゝ句ですねと喜んで居られた。

博士は又與謝野晶子女史の

鎌倉や御佛なれど釋迦牟尼は
美男におわす　夏木立かな

の歌が大變好きで、その中チャンスを得たら扇面にこの歌を女史に書いて貰ひたい熱望を語られた。僕が與謝野さんと懇意な方を知つてゐるから、その中機會を得たら賴んであげませうといつた處大變喜んで、名刺代りにとツアヘルト好みの凝つたマッチを下すつた。

佐々木博士の近著萬葉辭典に賴まれて推薦文を書いたから心持が出てゐるから讀んで下さいと云つて居られた。又佐々木博士からツアヘルトを通亞偏留東と漢字で書くといゝと云つて來たので有難く頂戴したとのことだつた。かくていつ果てるとも知れぬ風流談のさ中へ待たしてあつた運ちやんが豫定のタイムが來たので呼びに來た。そこで記念にとドアーの處で表札も入れて別揭の如き寫眞を一つパチリとふる雪の中で撮影して自動車の方へ向つた處、送り乍ら何か喋つてゐられるのが僕によく判らなかつた處、わざ〳〵塀の中まで呼びもどし、同じ松本高校の英語講師の住む隣の官舍の塀を指さし「僕はあの塀をジークフリート線と呼んでゐるのですよ。」との話に僕が仲々面白いですねと返事すると、「これは川柳になりませんか」と親しい處を見せられる。歸京の時間も迫つてゐるので再會を約して惜しい別れをつげる。（この廿六日に上京講演される由）

—一六、二、一八—

ハワイの蛇

古川風竹

ハワイには蛇が棲まぬ。他國から來ても育たぬといふのが通念であり、ハワイの自慢にもなつてゐた。布哇動植物學の權威ブライアン博士は其ハワイ博物史(一九二〇年版)で「ハワイに蛇なし」と斷じてゐる。ところが近頃ホノルルに蛇が棲み、ぼつ〳〵繁殖してゐることが發見され學界の興味を惹いてゐる。

この蛇は三吋から六吋半までの小蛇で、まづ蚯蚓くらいのものである。蚯蚓同樣暗い地中に棲み蟻や小虫を食としてゐる。蚯蚓が濕地を選ぶに反しこの新來の蛇は乾燥地を好むらしい。

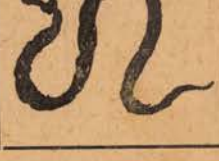
全體彼はどこから密航したものかと學者達が詮議したが原籍不明である。たゞ東洋種であることは確かで、多分數年前ヒリッピンの珍木を移植したとき、土に混じて運ばれたものだらふといふ說が一般に受取られてゐる。密入國者の學名は

TYPHOLPS BRAMINUS

とある。

細いながらも蛇としての形體は具備してゐる。兩眼はあるが明盲で、數世紀の暗黑生活を物語つてゐる。蛇は寸にして人を呑むが、この蛇は口も小さく顎はあるが齒がない。自身より大きなものを呑むこともできぬ。

それでも嚙まれるとチクリと痛いといふから面白い。無毒であり蟻やその他の害虫を食ふから益虫として生存が許されてゐる。



志賀高原

蛭子省二

雪は豐年の貢とのみ敎へられその寸は人さし指で測り得らるる程より知らないのだから、除雪車の運轉は映畫で觀、スキーは書物で學ぶ。豪雪の降らぬ地方にのみ住し、且、秋冬より初春にかけ年々痼疾のために褥上で暮らすのでは、到底眞に雪を理解する資格はない。僅に「北越雪譜」をよみ、近時通俗にかかれた雪の科學書による頭で推察するに過ぎぬのだ。

私は今も床上で、疊の上の水練的に、スキー書に親しむで居る。そして昨夏遊んだ志賀高原を憶ふ。フユッテ見物のために湯田中溫泉から木炭燃料バスに乘る。車は喘ぎ〻丸池小舍—國際觀光ホテル—の側まで運んでくれる。降りてからは山間の景趣を嘆賞しつゝ、暫くにして志賀高原フユッテの食堂に腰を下す。先客二組あり。若き兄妹のスキー人は、此フユッテに泊つた時の樂しい話を、番人のお婆さんとして居る。美的百姓の淑人さんが、農園から背負つて來られた西瓜を切り、一同に振舞はれたので、和やかな雰圍氣が漲り、人々と倶に語り笑ふ。雪への讃美である。澁茶を貰つての握飯は空腹を醫し、勿體ない程おいしい。

私はフユッテの隅から隅まで見て廻つた。かなり亂暴な原始的設備、一言以てせば下等な木賃宿だ。冷めたさうな煎餅布團が積まれてある。あの妹さんが、この汚點だらけの板よりも堅い疊の上で、中央に据えられた一箇の薪ストーブの暖に、辷り疲れた體を横へ、安らかな眠に就いたのであらうから、餘りにも勇敢だと思ふより外はない。そして五千尺の高原の白皚〻たる大自然の魅力を考へさせられた。さうだ。單に技術を樂しむ許りでなく、フユッテが心身鍛錬の道場であるとするなれば、木賃小舍もパラダイスでないとは云へぬ。たゞ私は我が觀光事業の一端にふれるため、數十萬兩の建築費をかけた觀光ホテルに、數日滯在してみようと思つてゐたので、一寸對照に驚かされたのであつた。私は神秘な靜寂を胚らむ木戸池にボートを浮べ、童心に返へる。山の氣溫は變化が激しい。リックサックから上着をとり出し着せて下さる。歸えりは道なき處を横ぎる。ウメバチ草、サ、リンドウ等々高山植物が咲いて居る。白樺の林もぬける。

半日の淸遊を了へ湯田中溫泉の大湯に浴し、手拭をさげて坂にかゝると、六十餘歲のお百姓のお婆さんが荷車を曳いて上つてくる。立どまつて過ぐるを見送るに、畑歸りの収穫が二籠に充ちて居る。今一ッの籠には五歲位の孫娘と小犬と辨當箱がはいつてゐた。私は今更に農家の勞働に感激し、感謝せずには居れず、車が角を曲る迄見つめたのである。——見學の爲めとはいへ觀光ホテルに宿泊する日取りなどケシ飛んでしまつた。

新聞の長野通信によると、スキーの志賀高原には國境なしとある。フユッテで撮つて貰らつた寫眞が、私のスキー書の栞となつて居る。

「旅で家で」其の三——一月七日記

街に住めば

高橋かほる

長女が學校から出した慰問文が池田師範の敎授である南支の某隊長殿に着き、某隊長殿からお返事を戴いたので長女が其お禮狀を出すと又隊長殿からお便りがあり、慰問袋を一度送らぬと濟まぬ氣がして、食料品のカンヅメに拙い繪と句ながら、枯木も山の賑ひとおなぐさみに

一回目兩花道が冷めたさう

の句と春の踊の繪を色紙に

ある筈の燐寸落した春の宵

の句と、夜櫻の二個連れの繪を書いた短册をお贈りすると、昨年の夏に隊長殿の奥さんが御丁寧に果物の籠入りを持つてお禮に見へ、今度はめでたく御無事に御歸還され、隊長殿御夫婦とお子達(ぼん〳〵)が改めてお禮に見へたので、お茶にお菓子を出したもの〻、内氣で社交の下手な私。相手が初對面の敎授であり、隊長殿の兵隊さんであるが故に難しいな、どうせうと思うてゐると、

隊長殿「實はこれは、われ〳〵が歸る時に戴いた恩賜のお酒ですが、高橋さんお酒を上るのでしたら一つ乾盃さして戴きませうか」

かほる「へーおゝきに」

二月堂食卓を出し盃洗ちよく燒きのりを揃へる。

奥さん「わたしお酌をさして戴きますわ」

かほる「へーおゝきに」

てな調子で乾盃々々しました。

狸

補追（其の二）

前田五健

次は舞台を江戸へ移します。安政五年の秋と申しますから八十餘年前の事です。幕臣で三百石を戴く小島利太夫は俳號を叉々と申しまして風雲稍や急なる時代でありますが、當面から遠ざかり風流に暮して居りました。

或日裏庭へ出て秋草をボンヤリ眺めて居りますと籬外の小路へ何時何處から來たともなく頭巾に十德の一老人が佇つて居ります。「よいお天氣で……」こんな會釋からお茶になり俳談になり、其日は別れたが、其後數回訪ねられる内に、俳諧で二人は待たるゝ友となりました。此の老人は俳號を巣仙と申しまして、此の隅田川の邊に隱居る商家の閑人だと云ふのであります。

「巣仙老人……今日餘程夜も更けて居りますから、お泊りなさい」「それじやお世話に成りませう」テナ譯で一泊する。こんな事が數回續く内に或日叉々老人の召使ひ佐助が、恐る恐る、「旦那樣不思議な事が御座いますので……」と云ふのを聞くと巣仙老が一泊する夜は必ず台所が荒される。初めは鼠だらうと思つて居たが、鼠でない全く不思議であると云ふのです。一度二度は聞き流しで笑つて居ましたが佐助が、あまり眞劍に申しますので叉々老人も巣仙老に注意する事に成りました。「ハテ巣仙老は便所へ行くにも灯を用ひぬ」「夜中何時聲を掛けても起きて居る」「魚、鳥の骨を嚙み碎く强い齒……犬を絶對に嫌ふ」「ハテナ……」と疑ひを持つ樣になりました。或日

「菊の花も哀れは人に似るものか　叉々

それとなくある諷刺を含めて「こんな句が出來ました」と巣仙老に見せると「成程ッ哀れは人に似るものか……イ、さびと、わびがありますな」

「縱横無碍に鳥渡る空」巣仙

こう附句して淡然として居ります。

「粟飯の加減も今朝はほめられて」　叉々

「台所から月の湧き出る」　巣仙

「こりや名吟……」不審を持ちながらも隙を見せぬ巣仙老人、台所の方は矢ッ張り異變が續きます。

「巣仙老今夕は鯉汁がありますが、それに小鳥のてんぷらも少々到來です。一泊して、碁をやつたり句をやつたりで……如何です」「それは御馳走ですな、チヤお詞に甘えて……」その夕方、老僕の佐助が忙たゞしく「旦那樣申譯の無い事を致しまして、あのう鯉汁の中へ油虫が落ちまして、てんぷらにも又た油虫が汚しまして……」「それは殘念…油虫を手打ちにもなるまい、巣仙老へ折角御馳走をと存じて居たに……その鯉汁もテンプラも捨てずに台所の隅へ片付けて置きなさい。又た乞食が來たら與へるとよろしい……何か他の物を代りに……」其夜、台所で巣仙が斬られて居たのは勿論です。小半程の狸で……圍碁を俳諧を解して居た老狸の憐れな最期は涙ぐましいものがあります。勿論町嘩に葬られて巣仙塚と稱され、叉々老人も明治三年七十三歳で沒し、塚も今はあと型もないさうであります。山崎美成著耽奇談の良恕狸は寒山拾得の繪をかき荻生徂來が所藏し、白雲狸は芦雁の繪をかき谷文晁が秘藏して居たとか、巣仙の短册でもあつたら、大したものですが、殘念な事であります。柳原の柳森神社、傳法院の鎭護大使者位になると狸もエライものです。然し巣仙も其所等に澤山居る「眞似狸」「豆狸」でなかつた事はエライものであります。此の話にはある社會道德諷敎の意味が包含されて居ります。忘れて居りましたが巣仙を斬つた刀は小島家傳來の名刀國廣一尺三寸六分の脇差で天和二年八月銘……巣仙國廣と命名されたと申します。

江戸時代には狸の傳說が多い樣です。何々七思議なんて、よく聞かされましたが、これも江

戸……元和寛永頃と申しますと例の講談などで武者修業濶歩、大阪方殘黨ぼつ〳〵の時代で辻斬なども腕自慢連中には流行つた時代であります。新刀を求めた、古刀が手に入つた一つ……此の一つが物騒です。紀州藩士富永金左衛門もその一人で腕は戸田流と田宮流の居合の達人、藩士仲間で辻斬の話を聞くと腕が、ムズ〳〵する……或日此の連中の寄合で「芝久保坂で失敗した」「俺も」「拙者も」所謂川柳に「御貴殿も拙者も」の口である。金左衛門が一と膝乗り出して譯を訊くと「町人らしい若者へ眞向から斬り下ろしたが空を打たされた上に履いて居る雪駄で顔を逆に撫で上げられた」「雪駄を中段に構えじり〳〵と押して來る。あの若者は達人でなければ魔性のものであらふ」こんな話で二三人の腕自慢が翻弄されて居る。金左衛門は尙ほ對戰の模様を詳細に聞くと大上段の斬込み中で眼から拂ひ突き入れも見事に外されて雪駄のみが眼前にチラッキ或は一杯になつて、飛られながら取逃すと云ふのであります。「ヨシッ俺に任せろ」寛永十二年十二月二十日ヒューッと鳴る夜風の中を芝久保坂へ出掛けました。待つ……案の上雪駄の音が近づく……間合を計つて拔討に……つまり左足を一寸引き、鞘奔ると共に右足大きく踏み出して、グット腰を入れて打ち下ろしたのですが一瞬時に打ち下ろしたのだが若者の體はヒラリと躱つて右手依りに水の如く、いつの時に脫いだのか雪駄で半身片手正眼に構へて居ります。金左衛門は左足を素早く對手の右側へ踏み込み右足が影の如く添つて同時に左足が後ろへサット引く一刀は斜めに左袈裟を斬りましたが、手應へはありません……若者と金左衛門の位置は入れ替つて居ます。「成程やるわい……受身で打つては來ぬが油斷が成らぬ」頭の裡内をこんな思ひが通る。再び中段から刀尖を上げ小手を打つと見せて猛烈な突きを入れましたが、モウ其處に若者の姿はありません。風の音のみであります。

翌日も行きましたが若者に會ひません。その翌日も翌日も行きましたが若者の姿は見へません。終に二十五日の夜……雪駄の音を聽きました。金左衛門は期するところがあるが、若者の姿を正面に見ても刀を拔きません。脫み合つたまゝ、その若者と摺れ違ふ刹那左足を引き蹋み加減に地上一尺位を横に一線、覆返しの再び石火の一線……勿論手應へは充分です。大狸の耳下と胴を見事に斬り割いて居ました。久保坂の狸も、やられた譯です。刀は與左衛門尉祐定、二尺三寸久保坂祐定と命名されました。日本刀と狸、これは狸も敵ひません。

（つゞく）

一路集

募集句

前金　蘭華選

前金でぐつとあふつたコップ酒　迷路
見合さす心算前賣座席券　千斗
前金へたがいに頭下げてゐる　彌生
前金へ内助の功を出してくる　石鹿
前金の領收印はこうく捺し　鶴聲
前金へ分まで貰つて鉋研ぐ　半休
暢氣さを見せて前金おいて去に　斗風
前金の雜誌貰つたやうに來る　勝二
定期券前金といふ餡で拔け　燦柳
前金を納めてしまう空財布　久枝
前金は悠々としてしまはれる　若榮
前金の順を帳面出して詫び　神樂
前金は信用の事に觸れず言ひ　數寄柳
柳前金を揃へて拜むやうに買ひ　九坡
前金の受領證財布へしまひ込み　ユリエ
前金の話へ一人だけ歸り　眞理子
前金へ傳統の客をうなづかせ　一龜
前金ときいて女房は念をおし　美奈子
前金を儲けたことにしてしまひ　香林坊
前金と云ふ事にして茶を啜り　みづほ
前金をとつて呑み込み顔になり　靜子
前金へ屆け先をも告げておき　抱逸
前金の家に十年恙なし　牛步
前金の戻り月まで冴えて來る　白鷗
前金を入れて仕上げの念を押し　十四之
前金へ御辭儀を添へて預けてる　青美
前金の後を御百度踏まされる　九柳
前金を費うてしもた月の末　紅多邑
前金は美麗な大きい紙幣で出し　葉光
前金を受けとつてから喫ひつける　耕水
前金を置いて半分承知させ　芳泉
見本だけ持つて前金ですと云ふ　同
（佳）前金を拂ひ話が長くなり　斗風
（佳）前金が要る一列の亂れよう　風來子
（佳）前金を受け取らずに骨が折れ　芳泉
（軸）前金へ納期しつかり賴んどき　蘭華

眼病　赫堂選

眼病と云つて山椒買ひに來る　迷路
眼を病んであちらを向いた生活する　葉光
眼病へ子供の仲の良さを知り　牛步
落ぶれたやうに眼病やつて來る　抱逸
眼帶の勇士も仰ぐ編隊機　千斗
眼病と云ひつゝ映畫館へ行き　鶴聲
眼病は春の光を避けてゆき　久枝
眼病になつて疑問符の現世　勝二
眼を病んで靜にラヂオ聞いてゐる　半休
氣短はひつきりなしに藥さし　數寄柳
泣いてゐるやうな眼科の應接間　耕水
眼帶を當てゝ不安な日が續き　小城子
漫性といふ眼藥の手の器用　芳泉
停年へ眼を患つてゐる課長　貞理子
眼藥をさして父ちやん泣いた顏　柳風
せがむ子へ眼病霞む字を拾ひ　九坡
前後ろ脊に子を負ひ眼科院　神樂
妻をしばらく眼病見てゐたり　風來子
家出した老婆の哀夜盲症　青美
眼病と對座をすれば斜向き　九柳
眼病の母に手馴れた厨ごと　靜子
泣きわめく兒へ眼藥の一二滴　詩朗
眼を病んで次々讀みたいものが出來　みづほ
暗室に心ときめく眼をつむり　若榮
眼病のもう諦めた顏で居る　香林坊
もどかしさつい眼帶を取りはづし　美奈子

川協の★★★★ページ

▼川柳界のうごきも大體目鼻がついたやうである。統一すべく生れた筈の日本川柳協會が、むしろ各地へ協會林立を促進した形だ。それでは新體制が泣く。役員諸氏に新體制の理念が充分のみこめてゐないのではないか。

▼斯うなると、わが川柳人協會が今更のやうに見直される既に六ヶ年の實績があり、麻生理事長を中心に全國並びに海外の一人一人の魂の結合で出來上つてゐるだけに、柳界の先進に、記念品を贈呈して其の勞に酬ひたり、柳人多數の災火に際しては御見舞を募つて慰藉したり。社會事業に協力して公益優先の實を擧げたり、事々しく宣傳こそしないが實にスムースに川柳人協會の使命の一端を果して來たのである。わが川柳人協會は大政翼賛だなどと大言壯語こそしないが、内には常に燃ゆるものを把持してゐるのである。ホントの仕事は不言實行にある。そうすることが眞に國策に沿ふ所以であると思ふ。

▼朝鮮川柳協會が設立されたので、「川柳三昧」は四月號から「川柳朝鮮」と改題、協會機關誌として刊行されることゝなつた。

▼「近代」「戰場人」「視野」の三誌合同、新に東京から「川柳公論」四月號が刊行されることになつた。それがため大連で引受けてゐた「卷雲」も第四卷第二號で一終刊號となつた。

▼大京都川柳社が成立して、「川柳月刊」三月號が刊行された。從つて「京」「川柳ビル」「同人」「御所車」「草笛」の各誌は二月號限りで發展的解消をした。「川柳月刊」の發展を祈る。

▼愛媛川柳社では川柳伊豫綜句合集の第二輯刊行計劃が發表され二千六百年創作句中より十二句以内會費二圓、締切は五月卅日であると。

▼神奈川縣川柳人が打つて一丸となり、横濱川柳人倶樂部を結成、機關誌として「川柳道」の創刊號を刊行した。

▼古川柳研究(東京)は二月號休刊、三月號が刊行された。

▼大阪市民厚生道場としての松坂倶樂部では三月三十日正午から「先生常會」を開催、川柳講座擔當の麻生路郎氏出席の筈。

▼大京都川柳社では三月十六日午後一時河原町昭和圖書館樓上で、社の結成大會を開催せられた。

▼川柳色紙の展示會(新京)が濤明、八翠坊、蛇太郎、唯然正夫の諸氏等によつて新京の一光喫茶店で開催された。

▼伊志田孝三郎氏(名古屋)は三月十六日に孝三郎居で川柳屏風完成記念の會を開かれた。

▼愛媛川柳社(松山)では四月十三日午後一時から松山城頭に於て春季大會を開催される由、兼題姫だるま、白狀、建設遠望、母各五句、會費五〇、投句三〇、松山三番町大時支局内。

▼正木柳建寺氏(京城)中樞院通信二月號に滿洲・北支・中支視察隨筆を執筆された。

▼北陸川柳協會では、安川久留美氏句髮畫小品の會を催し同好の士に頒布する由。一口金四圓五拾錢(郵税共)但し表裝附、締切四月十五日、希望者は金澤市長町七番丁野崎如月堂宛に申込まれたい。

▼森半壘氏(旗沿)が北京へ旅行中、天津東站で下車するを北站に變更したところが偶然隣席に森東魚氏が乘合はしてゐたので路郎主幹の噂や日本柳界及滿洲北支柳界の消息など語り、再會を約して別れたとの通信に接した。これこそ全くの奇遇で、廣いやうで狹い北支だとは云へない。

▼佐々木三禍氏(大連)は御令閨の御病氣御加養のため來阪され、三月十二日本社へ來訪された。

▼石崎柳石氏(廣島)から五月十五日の葬祭に學部一同で出京し、歸途來社される旨の通知に接した。

▼富本無煙氏(大阪)は阪大病院へ數ヶ月間入院されてゐたが三月退院された。

▼渡邊雨明氏(大連)は張家口へ出張、岩崎柳路氏(不朽洞會員)を訪問して柳談に花を咲かしたとのたよりに接した。

▼今西鼓愁氏(大阪)は〇月〇日入營される由。

▼澤田四郎作氏(大阪)は五倍子雜筆「うつしばな」を刊行亡き夫人の三周忌に際し有緣の人たちに頒たれた。(非賣品)

Sata Special Klinik

呼吸器病科 内科

診療 毎年 日曜

醫學博士 佐多愛彦 電話 3

醫學博士 加藤謙一

醫學博士 螺良四郎 電話 1151

市廳堂島中町分所 留所北社社西入

佐多醫院

大阪堂島北町 電北八二八四

眼帶へ醫師の時計のよく響き　一龜

眼帶を解く手が鈍る手術台　同

眼帶で來ても座長はよく喋り　水虹

盲せる額へ風が暖かく　同

眼帶の妓の唇が赤く濡れ　石鹿

眼科室はて面妖な器具があり　同

眼帶の濕布がいたい春の宵　斗風

眼病の緣カナリヤが鳴きやまず　同

眼病と云ふのか老僧眼がかすみ　彌生

眼帶で噂の中へ來る女　同

春かなし眼帶をしばたゝく　ユリエ

眼帶が少しずつてる滿員車　同

(佳)　眼帶の勇士白衣に手を引かれ　芳郎

(佳)　失明の一歩手前の灯をたぐり　眞理子

(佳)　母の死が今日の眼科へ通はせる　美奈子

(佳)　代筆を賴む眼帶起き直り　葉光

(佳)　眼帶の蔭でこつそり泣いて見る　九坡

塚越正光先生の選、教科書の選稿が本號編輯後に着いたので次號に發表することにした。(編輯局)

非特異性全免疫元

オムニン コメット

本劑は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。

(適應症)

流感、各種肺炎、肺(膜)膿炎、扁桃腺炎、中耳炎、蜂窩織、其他各科、急性、慢性、炎症性、傳染性、敗血性、並に化膿性諸疾患に對し異乳に渉り著効を奏す。

(特長)

注射無痛、副作用絶無、形狀簡單、奏効迅速、價格廉賤。

(價格)

一〇〇瓦入　一二〇錢
一〇〇〇瓦入　一八〇〇錢
一八〇〇瓦入　一八〇〇錢

一文獻贈呈

發賣元　株式會社　黒田藥品商會　大阪・東京

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿規濟

▼用紙は原稿用紙
▼文字を正確明瞭に
▼開催月日及場所記入
▼締切は毎月廿五日
▲投稿先は本社宛

本社三月例會

三月一日　於　御津八幡宮

出席者（順不同）

路郎・紫香・鮎美・玲之介・麥秋・帆船・要兒・香林坊・千斗・翠光・九平・花笑　小雅子・一鳥・水客・彌生　桃園・角堂・かほる・巨人・双葉　富士　默平・欣一・美知夫・綠風・文雄・潮花・安靜・虔乃・寄與史・八九滿・萬的・大研子・白柳子・紅多呂・りり

席題「物音」　互選

物音をよく聞きわけて病み續け　一鳥
巡査ふと物音のする方へより　紫香
物音にもう馴れてきた見習工　欣一
物音も無事でよかつて笑ひあひ　富士
物音は忙しい顔を振り向かせ　水客
喰ふための物音だつた獨り者　八九滿
物音が遠くでしてる湯へつかり　花笑
物音に女學生同志また笑ひ　萬的
猫　貰ふ話　鼠が　音を　立て　安靜
物音で親父の顏が目に見える　綠風
物音が氣にかゝりつゝねてしまひ　大研子
物音へ犬を信じて又寢入り　要兒
物音を立てずに置いた藥びん　双葉
物音の何かは知れず未だ續き　九平

席題「二階」　水客選

二階から歸へる女の背を見つめ　潮花
二階から呼んで夜なきをまごつかせ　富士
口笛は二階を呼んでゐるらしい　一鳥
階段を一つ踏んで呼ぶ二階　九平
お二階も廻覽板へ判を押し　先斗
二階できく女の話みじめなり　萬的
聖書一册二階の埃拂へども　鮎美
銀行の二階は手摺だけでよし　玲之介
眺やかな二階送別會としり　欣一
突きあげる樣に二階へ案内され　潮花
二階いま掃除しているらしい音　欣一
吸殼が松へ留つた二階借　先斗
二階から降りる仲居の眼が笑ひ　潮花
二階迄默つて上る友であり　文雄
自像畫をはつて二階のほろ温くし　鮎美
山の雨旅の二階に茶がうまし　水客

席題「眞ん中」　默平選

座談會その眞ん中は歸還兵　九平
珍客へ子を眞ん中に坐らせる　巨人
眞ん中へ恩師記念のカメラ向け　帆船
眞ん中に坐れる程の年になり　綠風
眞ん中の國旗へみんなきつと立ち　紫香
眞ん中が一軒のこる貸家札　富士
茶柱が眞ん中に浮く茶をよばれ　先斗
眞ん中に火鉢常會春の宵　彌生
眞ん中の一人が異議を申し立て　双葉
眞ん中で出征兵士寫される　同
眞ん中の人の帽子がじやまになり　潮花
吊り橋の眞ん中へ來て振り返り　美知夫
眞ん中に坐り眞面目な顏をする　安靜
眞ん中の人が一番よくしやべり　白柳子
眞ん中に立つて兵士も唄つてる　麥秋
眞ん中を遠慮してゐる故郷の母　紅多呂
眞ん中で手を翳すのが僕の母　先斗
眞ん中の一人は戰死んだ寫眞帳　一鳥
花道の眞ん中六代目の至藝　玲之介
大阪の眞ん中で呑む日本茶　九平
眞ん中へ書けと日の丸子に教へ　潮花
父さんを眞中にしてそれで良し　寄與史
眞ん中を開けて通した赤襷　一鳥
眞ん中で寫す金婚式の父母　默平

席題「大聲」　かほる選

大聲でどなれば眼鏡が落ちそうな　萬的
橋越えてくる大聲の河豚仲間　鮎美
大聲になつて庭から覗かせる　桃園
大聲は吹雪の中をくぐつて來　紫香
大聲で內輪同志の酒となり　八九滿
くび卷をして大聲の船世帶　鮎美
頂上の大聲妻を驚かせ　同
大聲で呼んでも返事のない風呂場　欣一
大聲を出せば皆んながふりかへり　巨人
大聲は正直そうな顏を持ち　香林坊
大聲がまだ續いてる夏の海　欣一
大聲の萬歲汽車は動き出し　巨人
大聲の知らせ都會に孫が來て　綠風
大聲の男メガホン持つて立ち　潮花
團體を揃へる大きい聲となり　紫香
畫めしを報らす大聲脊伸びして　かほる

兼題「筍」　鮎美選

筍の皮面白く子に剝がせ　巨人
筍を掘る嫁の手がやはらかい　水客

筍の皿をふやした春の客　双葉
筍の土に故郷の香りする　小雅子
筍を切る俎板の小ひさくて　かほる
露にぬれた筍女の手があかい　萬的
筍の片荷は菖蒲賣りに行き　半休
筍の皮美しう裏を見せ　かほる
歸郷した子と筍を掘りに行き　欣一
筍の朝はお伽の霧が立ち　鮎美

兼題「廻覽板」　路郎選

廻覽板豫備少將の字のうまさ　巨人
廻覽板持ち堂々と表門　玲之介
廻覽板へ父は眼鏡をかけ給ひ　巨人
廻覽板明日は國旗の下へ寄る　双葉
廻覽板春の事まで書いて置き　かほる
廻覽板廻つてゐるか氣を使ひ　香林坊
廻覽板濡れ手のまゝで押す認　潮花
廻覽板畫の事務所の戸が堅し　かほる
廻覽板かしこい犬が欲しくなり　同
廻覽板屋號の判を捺して來る　紅多呂
廻覽板貸した雜誌ものつてくる　綠風
廻覽板僕持つて行く持つて行く　九平
叮嚀に假名がついてる廻覽板　美知夫
廻覽板ついでに留守を賴まれる　水客
廻覽板男ざかりを家に居る　同
廻覽板上意下達の行き屆き　翠光
廻覽板僕のお嫁の事につき　寄與史
廻覽板町の名譽を知る日なり　八九滿
廻覽板置いて容態聞いてくれ　双葉

雜川　廣島支部句會（廣島）

みさごクループ（二十九回）大森風來子報
一月三十一日　於明治製菓

襟元の汚れ氣にして旅の朝　伯峯
トーチカを出て國境の陽を浴びる　風來子
町境はつきり塗つたアスファルト　幽香里
此處からは他國つめたい風が吹き　伯峯
トランクを境に妙な人と座し　三昧
地境へ西も東も豆を植え　同
帶垂れたまゝ帶締へ氣が變り　幽香里

二月二十八日

廿歳の野心妄想に似る　須彌浩
目印を探す足許黃昏れる　九坡
想ひ出の目印をして山を下り　幽香里
一言も言はさず親は見拔いてゐ　草雲子
かゞり火が目印となる着陸地　美彌坊
釦きつちり口答試問室へ立ち　久米雄
花嫁の遠慮勝ちなる頭痛膏　月浦
あきらめのよい程雨が降つてくれ　三昧
灯がつくと頭痛そろ〳〵髭を剃り　秋無草
下手くそな謠頭痛に變るなり　麗美
他愛ない事が頭痛の種であり　伯峯

雜川　下關支部句會（下關）

一月十日　於市多樓居
國弘半休報

醉ざめへ冷めたく響く口答へ　半休
口答へ繼母といふ意地があり　代志久
口答へまだかと母は手を揚げる　苦笑
言ひ分があり口答へしてもみる　半休
口答へだつた障子の音を立て　草路
口答煙草持つてる手が振ひ　市多樓
口答へする子の袖を母は引き　柳月
口答へ結局まづい膳にする　不川
國技館ラヂオに見える土俵際　蘭京
日本人らしく負けてる國技館　草路
國技館唸らせ双葉勝ちつゞけ　柳月
常識の答滿點とは云へず　殘月
常識が新體制で一つ殖へ　光輝
秀才で出て常識に立ち遲れ　不川
常識で考へられぬ事故が起き　柳月
常識を忘れ露骨な目で見られ　市多樓
常識も古いかたちの櫺の母　不川
書初へ新體制と强く書き　山彥
書初の子等皆偉くなつてほし　不水
凧揚げる醉へ書初落着かず　九坡
書初へ横の火鉢の炭がはね　市多樓
書初へ無筆の母も來てのぞき　默笑
書初めへ頑固な父の手がふるへ　米三
書初の誤字へ煙管の首が來る　白陽子
勤勞に汗ばむ奉仕の列に入り　正晴
眞黑になつて働く家庭陣　みつる
勤勞の夫へ早い風呂が待ち　風來子
頑張つてゐると戰地の太い文字　同
頑張つて見たが涙の親に負け　九坡
頑張らうぜと塹壕の泥を嗅ぎ　同
親と子が一つ心で切拔ける　潮流
挨拶に來て貧乏の愚痴もきゝ　同
挨拶が上手になつた里歸り　狂兒
挨拶が日本を背負ふ醉となり　風來子
召され征く子の挨拶の語氣强く　九呂平
日章旗仰いで勵む拓土村　默笑
躍進の夢を枕に病みつゞけ　つゞる
躍進へ俺も一役買ふ夜業　市多樓
躍進へ國民服の氣が揃ひ　秋吉

雜川　今治支部句會（今治）

二月十一日　長野文庫報

占領の地點を探す老眼鏡　心府
犬連れたおかげで地圖もなく戻り　向上庵
時間表地形無視した地圖でよし　鬼外
地圖にない河さへ有つて支那廣し　地下水
招待狀下車してからの地圖も入れ　竹詩
斥候の道は地圖にも出て居らず　大西
ニュース聽く前にひろげた地圖一つ　紫風
印刷中早や變つてる世界地圖　文庫
出征の兒の位置も知る壁の地圖　同
受け答へ出來る床屋の壁に地圖　漫步
激論の結局世界地圖を出し　市多樓

要り相もない腕に有る腕時計　文庫
時計屋で十二時を聞く暇かさ　鬼外
臨終へ他人は時計見てくれる　宵明
褒められた教練時計の針がとび　若蘭
ボーナスで買つた時計が流れそう　大西
寒行の今夜も此處で紀三井寺　心府
團扇太鼓街を曲つた音になり　漫歩
寒行のうしろ姿へ犬が吠え　宵明
決斷がついた所で灯がともり　同

雑川　**岡山支部句會**（岡山）
二月十五日夜　於禁酒會館　鈴木九坡報

忘られた鉢が芽を出す庭の隅　鼻高面
その隅にまだ一人ゐるかくれんぼ　信太郎
年頃は隅に置けないことも言ひ　灯竿
合所の隅時ならぬ虫がなき　眞理子
常會の隅では別な話が出　洋子
掃除終了教師隅だけ見て廻り　鷄城
下戸は下戸同志で隅へならんでゐ　九坡
その隅は幹事席だと追ひ出され　玄々洞
辛辣な批評日記の隅へ書き　眞理子
オフイスの隅で青春忘れられ　ユリエ
人からは馬鹿にも見えて隅へ居り　一二三
冗談が言へて外交そつがなく　紫香
外交に馴れたパイプのくわへやう　鷄城
外交の事に觸れない歸朝談　洋子
外交の口の輕さをうたがはれ　信太郎
外交員靴光らせて光らせて　灯竿
正直が外交員になり切れず　九坡
ステッキを妻に預けて古書漁り　魔天樓
古本即賣會見るだけの顔であり　ユリエ
先生をしたこともある古本屋　耕水
古本屋奥の方から物を言ひ　玄々洞
古本に飽けど齒醫者で番が來ず　洋子
國寶の古書を硝子の外で讀み　はの字
月遲れ母に聞かせる五燭光　はの字
處女出版もう古本屋で買ひました　風來子
古本屋名を消すことに馴れてゐる　灯竿
希望なき手に古本が開かれる　紫香
油斷したばかりに猫をよろこばせ　洋子
空襲を風呂場で聞いて風邪を引き　正夫
湯氣の中母のやつれへ目をそらし　洋子
風呂だけが樂しみですと年齡をとり　九坡
仕舞風呂今日は何曜かと思ひ　眞理子
風呂の湯へシャボンの良さを褒めたる　九坡
貰ひ風呂ついでにラヂオ聽いて去に　魔天樓
野天風呂月が隱れたまゝで浴り　九坡
据風呂の母へ父親子を渡し　耕水
注文の笑ひが過ぎて寫し兼ね　玄々洞
團欒に笑ふ父上髭八字　武二
笑ふ子に腹の空いてるのも忘れ　魔天樓

雑川　**四ツ橋支部句會**（大阪）
二月十二日　中内翠芳報

トランクを提げて乘場に困つてる　翠芳
トランクは古いが皮で大事がり　德麿
トランクの上に置かれるわさび漬　かほる
トランクが腰掛となる汽車の旅　夢想
トランクの置場に困る滿員車　綠雨
針箱と言ふは名ばかりよろづ箱　夢想
針箱も嫁の氣質が讀めるなり　秀甫
針箱も買うて嫁く日を待ち兼ねる　翠溪
先祖の墓守驛まで迎へに來　山人
大陸へ先祖の位牌持つて行き　美奈子
新體制先祖の職もなげうちぬ　同
御先祖のお蔭藥を呑んで生き　翠芳
鍛錬に大地を踏んだ心地よさ　青雲
鍛錬の列に加はる霜の朝　朗舟
鍛錬が出來て十里も一走り　秀甫
寒風に鍛へたのだと腕を見せ　綠雨
鍛錬に一家總出の奉公日　糸柳
鍛錬が光り輝く賞に入り　夢想
鍛錬に寒さ忘れた裸ん坊　朗舟
鍛錬が出來皇國の役に立ち　靜峯

雑川　**竹原支部句會**（廣島縣）
一月十五日　於芳泉居　西野みづほ報

宿直へ安產のベルが鳴り　芳郎
一人兒へ希望をかけて共稼ぎ　愛鳩
やりくりの生活を知らぬ娘の希望　同
下役の不平は蔭でもみ消され　愛鳩
四十九日濟めば叔父貸金のことにふれ　芳郎
子が出來た頃借金のあるを知り　芳泉
左前借金取もチトあせり　紫蓮
受付へ妹ですと云つて置き　芳泉

雑川　**渚支部句會**（大阪）
金政細泉婚禮披露句會　丸尾潮花報

來客へシャボンの香りおち切らず　競舟
洗面器子の洗濯へ持ち出され　潮花
鍋燒を娘は店の隅で喰べ　水仙
牛鍋へみんな揃うた顔が寄り　細泉
手鍋さげて貴男と云ふつもり　鼓愁
豆腐屋へ鍋持つ人が追うてくる　紫香
親友も花嫁さんへ堅くなり　利山
花嫁の耳へ新夫の甘い聲　みのる
花嫁の顔がちらつく歸り道　和坊
花嫁の白足袋音もなく進み　鷹丸
花嫁が今日來る部屋の金屏風　花笑
花嫁の小さな義理をたてゝやる　紅多呂

雑川　**布哇支部句會**（ホノルル）
一月十三日　於歡樂　前山北海報

颯爽とミス・ニッポンが露地を出る　一浪
待てど〳〵海路の日和俺に來ず　無有
いざ征かん路は六百八十里　魔花麗

援蔣路又日の丸が一つふえ　同
喰はれるか喰ふか亂世の岐路に立ち　芋作
文明は地圖に空路の線を增し　沙兆
もう既に路傍の花だ思ふまい　友郎
日語校路傍の石の樣にされ　長洲
踏んで來た路は路でも戀だつた　幸造
愛の巢を亂す遠慮もない男　友郎
醫憤の遺塲石ころ蹴つて見る　同
母の聲めつきり嗄れた寒い朝　草一郎
心境の變化すつかり角が取れ　同
いゝ店主けさも歩道を掃いてゐる　山石
君達は若いと言へる禿げ具合　風竹
誕生日母は知つてる年をきゝ　同
人生行路平らな處見當らず　伯樂
わが前も右も左も茨路　松籟
よく見れば汽車の線路も長いもの　快夢起
翼贊は問答無用新體制　北海
米國へやつた養子とあきらめる　同
新春の幸は社頭に見る二人　惇夫
世の中は目をつむつた方が面白い　伯樂
生活の保障程度の平社員　魔花麗
統制は故國訪問案じさせ　長洲
國技館仕切りの響迄聞え　同
出る所へ出れば色氣のない話　一浪
日溜りの尻切れ蜻蛉どこへ行く　松籟
新體制おれの狙ひは貯金なり　羽山
結納のダイヤ期待の蓋を開け　風竹
春場所を聞き漏さじと裏家を出　葛彌
口笛で見る空からのアロハ塔　草一郎

雜川　堺支部句會（堺）

村上角堂報

英靈の還る日を待つ母は老け　喜堂
英靈の通過感謝の眼が續く　八郎
英靈に恥しからぬ勤め振り　霞舍
世話ずきな外交員で親しまれ　九平
外交もして來たと云ふ家出の子　波夢造
外交を羨んでいる良い天氣　八郎
切炭がはぜ鶯が一度鳴き　かほる
鶯も聞いて戻つたハイキング　一鳥
鶯を一聲聞いて炬燵拔け　喜堂
大寺餅丁稚時代に喰ふた儘　九平
大寺餅頬張りながら鳩を追ひ　角堂
㊙の味も變らぬ大寺餅　八郎
參詣の目當大寺餅にあり　波夢造
里歸り大寺餅を買う積り　露舍

松坂倶樂部句會（大阪）

二月二日　石井白面人報

古本屋それが著者とは知らざりき　普天
新刊の早や古本に並んでる　同
四五頁書込んである洋書買ふ　孤篷
胸算と違ふ古本賣つて出る　白面人
槿花一朝佳人の白髮佗しけれ　美根子
白髮ぬく手に佗しさのかげを見せ　同
後輩もよい白髮なり十年目　普天
主事でゐて課長を凌ぐ白髮振り　同
五厘刈りやはり白髮が氣にかゝり　同
若白髮そのまゝ隅で飲んでゐる　孤篷
還暦を白髮染など知らず越し　同
禿白髮本人だけが信じない　白面人
ネクタイの赤さと白髮比較され　同
名士今展墓の旅の賑はしさ　美根子
村長は名主のきげん見逃さず　同
地方版名士の孝行出されてゐ　同
年賀廣告だけは名士の列に入り　普天
名士から活字の御禮狀がくる　孤篷
ペンネームだけは知られてゐる名士　同
放送で聽けば名士もちとどもり　同
可笑さへアハハと名士機嫌なり　白面人
箸もつたとこを名士は撮される　同
花嫁に聞かしともない暮し向き　生々庵
あんな婿へゆく花嫁をいとしがり　同
花嫁の癖をヒソ〳〵語り合ひ　白面人
オードブルからデザートまで花嫁の勇敢さ　美根子
花嫁がすぐに口きくいとこ同志　同
花嫁が砲丸投げの記錄もち　同
花嫁も出て翼贊の隣り組　普天
連れて出る嫁の衣紋を母直し　同

掠奪結婚

つかまへて來た花嫁はちと跛　孤篷
お人形の樣に花嫁ほめられる　同
花嫁へ里の雜煮とちと違ひ　孤篷
二人きりになれば花嫁よく笑ひ　同
朝顔へ運ぶバケツは兄の役　白面人
バケツ持つてモンペの型が氣にかゝり　同
味噌汁をバケツで運ぶ演習地　孤篷
井戸端へくるとガチヤンと置くバケツ　同
水打へバケツさげたい男の子　同
貰ひ水バケツ一つがもどかしく　普天
廢品報國破れバケツが王座占め　美根子

住友川柳會（尼崎）

一月十五日　橋本路風報

ひとうすの餅で迎へたお元日　南濃路
元旦だ去年の不幸など云はず　寄與史
元旦はイヨーですまぬ御挨拶　和郎
少々は云つてやりたいが元日だ　路風
滿員へ高下駄はいた背がほしい　和郎
滿員車天秤棒は斷はられ　美知夫
寒空に滿員電車素通りし　覺榮
滿員にすまぬ思ひの相撲取　正子
滿員車棚の荷物がちと遠し　文月
滿員御禮しかし少しは空いてゐた　同
緣起笹電車へ迄は無事だつた　八櫻
孝行者少し馬鹿にも見られさう　路風
孝行のつもりで同じ趣味に生き　美知夫
孝行であれば一人で良いと云ふ　寄與史

嫁貰ろてする孝行のむつかしさ　美知夫

二月十日

その希望紹介所へ來てくぢけ　寄與史
紹介所の前のうどんやよくはやり　八櫻
歸還兵紹介所へとび込む氣　正路
紹介所國民指導所となり大童　齋藤
紹介所望叶つた顏で出る　毬夫
紹介所たゞ同情をされたゞけ　同
この人に無理だと思ふ紹介所　美知夫
紹介所自己宣傳を持てあまし　毬夫
學歷へ氣の毒そうな紹介所　美知夫
紹介所眼で示されし堅い椅子　文月
花嫁は座を改めてお母樣　麻夫
花嫁へ家風冷たく迫つて來　美知夫
股火する花嫁もある舞台裏　辰巳
大陸へ行く花嫁に親がなし　寄與史
花嫁のどちら向いても職と出合ひ　美知夫
政界を論じ學生茶をすゝり　寄與史
女學生悲喜交々に窓の雪　孤舟
入社した當座學生服ですみ　毬夫
制服にいさゝか飽いた女學生　文月
轉業の學生氣質まだ拔けず　南濃路
學生のある日ノーシンへも頼り　美知夫
學生と思へぬ程に世辭になれ　文月

有恒川柳會（大阪）

寺井鋭々報

二月十三日

試驗官參考までと趣味も問ひ　杜丹
未だその趣味を解せずうるさがり　波夢造
よい御趣味ですナアは金を借りに來た男　同
趣味の域にとどめて旦那無難なり　同
趣味淸談何れも樣が苦勞人　紫葉
未亡人習つた趣味が役に立ち　青美
趣味一つ持たぬ男の產をなし　鋭々
女店員が選つたネクタイとは云はず　同
趣味が含ひ伯父樣を連れにする　同
世話きの案外趣味のない男　朴堂
集印帳こんなとこまで行きました　同
何一つ長持ちはせぬ趣味を持ち　同
先代の趣味が話題になる法事　杜丹
手袋も慰問袋へ入れてやり　波夢造
手袋のビーズが光る若夫人　五遊
手袋のよごれ厭はぬ新體制　紫葉
持ちつけぬ白手袋が邪魔になり　大友
片一方篏めてゴム手袋が賣れ　同
豆炭に軍手は少し大なれど　同
回禮に白手袋は持つたまゝ　青美
手袋をぬぐは小錢を出すつもり　同
手袋で輕く叩いて逃げてゐる　鋭々
手袋の同んなじ方をまた落し　同
手袋が一つ落ちてる終電車　朴堂
手袋のまゝで集金忙がしい　同
働いて歸る軍手の子澤山　同

麻生川柳早鐘句會（大牟田）

高田抱逸報

二月二十五日

フラッシュも馴れて演說上手なり　十四之
原稿の儘の演說どもつてる　敏一呂
制限の時間に演說良く纏め　龜水
講演が濟めば拍手を脊に浴せ　進
演壇に立てば拍手が鳴りやまず　一秋
演說をする人國を脊負ひそう　須惠夫
演說も大將と言ふ重みあり　梅春
辯士まだ頑張るらしい咳拂ひ　秀湖
陸相の決意語調も引締り　抱逸
殘業はあんたに限ると持つてくる　美弘
健康であつて殘業ひきうける　竹兼
殘業に馴れて貯金もふえて來る　一可
下宿屋も殘業ならと起きてゐる　須惠夫
殘業へ心盡しの膳も冷え　一葉
殘業の歸り待つ間も針運ぶ　進
仕舞風呂もう殘業の歸る頃　さゝを
殘業へまだ働きの足らぬ意氣　初舟
殘業の有難味知る給料日　平人
戰線を思ひ殘業やつてみる　石貫
殘業へ課長優しい醉をかけ　北の
殘業と知らず新妻嫉いてみる　秀湖
殘業の父を待つてる通信簿　十四之
殘業の音ハッキリと印刷屋　抱逸
奉公日俺だけ禁酒する氣持　末俊
今日だけの禁酒へ笑ふ奉公日　一可
奉公日やつぱり祖母が先に起き　吾平
奉公日妻の意見も聞いてみる　同
尋一の奉公日だけは知つて居り　森夫
奉公日お酒は妻に押へられ　平人

麻生川柳早鐘會の人々（大牟田）

前列向つて右より
一葉・一秋・抱逸・舟可・茂洲
中列右より
馬熏・龜水・秀湖・十四之・進・平人・初舟
後列右より
約多呂・酒風・松雪・齋・さゝを・梅春・須惠男・吾平・馬笑の諸君

奉公日みんな個人主義を捨て　馬熏
奉公日夫婦は別に自肅する　抱逸

橿原神宮參拜

神域の廣さ奉仕の汗思ふ　久米雄
裏參道露のしめりの中を來る　紫香
橿原神宮足の幅などかんがへる　賢次
參道の玉砂利一つ一つ踏み　草雲子
悠久の聖壽を仰ぐ宮柱　秋史
玉砂利をふむ足音がよく揃ひ　水客
橿原の驛の造りを尊とく見　市多樓

柳界展望

催

▼本社句會(二月一日夜)松坂倶樂部川柳講座(二日、十六日)住友親友會川柳會(十日)川雜尼崎支部句會(十一日)有恒倶樂部川柳講座(十三日、廿七日)阪大川柳會(十九日)▼川柳雜誌社堺支部では三月廿一日午後七時角堂居に於て三月例會開催▼川柳雜誌社岡山支部では三月八日禁酒會館で例會を開催した。

消息

▼戸倉普天氏(不朽洞會員)は三月十日所用で東上、十三日札幌へ廿日歸阪された。

▼橋本絲雨氏(不朽洞會員)は美奈子夫人同伴、鄕里石川縣へ近親の法事で歸省された。

▼下關支部では三月十一日例會を開催、宮川柳月氏が〇月〇日入營されるのでその行を壯んにした。なほ同夜、廣島支部の長谷川秋史氏も出席された由。

四★月★句★會

★四月五日(土)午後六時
★柳津八幡宮
★兼題「洋館」「櫻」

主催 川柳雜誌社

▼濱田賢次氏(不朽洞會員)の盡力で本月から日和佐町へ川雜支部が創設された。

▼北山悟郎氏(不朽洞會員の令息明氏が名譽の負傷で〇〇病院へ歸還された。

慶

▼勝谷山川兒氏(松江)は二月二十六日目出度く華燭の典を擧げられた。新婦のお名は光子樣であるとのこと。

改號

▼上田翠峰氏(布施)は奈良縣龍田町の嶋田翠峯氏と雅號が同一なので、句の發表上支障を來したゝめ弊社斡旋で、川柳後進としての禮をつくされ、快よく翠光と改號された。

正誤

▼川柳塔(三月號)六頁下段二行目「㊗の吉兆買ふはたよりなし」七頁上段四行目「親戚で開けば先祖が又違ひ」七頁下段廿五行目「先生の嘘チョークの粉を散らし」九頁下段卅四行目「珍客に座敷の蟻を見つけられ」近作欄(三月號)十六頁上段五行目「常會の云ひ足りぬ分家で云ひ」十六頁上段廿五行目「大切に大切にするじゆんめん」十七頁上段廿九行目「彼の人に髭があつたか・なかつたか」十七頁下段卅二行目「大陸の廣さ視察者呑み込めず」十九頁上段七行目「なむあみだぶつ稽古した聲せぬ口調」

社告

▼支部異動 左の二支部を創設した。

川雜日和佐支部(德島縣)
幹事 濱田賢次氏

川雜早鐘會(大牟田)
幹事 高田抱逸氏

▼川雜渚支部(大阪)幹事更迭

▼井翠花氏が幹事を辭されたので、金政細泉氏と更迭。

▼森本素木氏(岡山)は家事の都合上、不朽洞會員を辭された。

★★★★★ 記後 ★★★★★

▼白樺の上で、仲よく編物をしてゐる二少女のなごやかな風景の表紙に、私の繪筆のペンもこころよく運んで行く。こちらで運れさせて置いて、締切を早めるのはどうかと思つたが、待合はしてゐて、發行日に出ないやうでは、定期に原稿を出してゐる人たちに濟まないと思つて、一度だけ眼をつぶつて早く締切ることにした。乘遅れた方はお許しが願ひたい。▼高鷲亞鈍氏の「奥村丹路論」は本號で完結したが、柳界稀れに見る大論文だつた。▼岡田某人氏の「貝釦」もこれ又本號で終つた。永々御愛讀下さつたことを執筆者に代つてお禮を申上げる。▼阿部佐保蘭氏の「ドクトル・ツアヘルトと語る」は日獨提携の上によき收穫をもたらすことと信じて疑はない。▼古川風竹氏の「ハワイの蚍」は土地柄だけに異色がある。▼小畑自由朗氏の「愚談田舍の暦」はだんだんユーモリストの本領を發揮、少しく時事に觸れて來て、前號の「愚談」と又違つた興趣をそそられる。前號の「愚談」には涙をこぼして、こけ〳〵笑つた人があつた。▼拙稿の「吟行地訓べ奈良篇」は豫想外に好評だつたのでよろこんでゐる。どちらかと云へば地味な仕事なので、どうかと思つてゐた。それにしても古川柳を探し出すのに意外に時間を潰すので、なるべく新作で行くつもりだ。奈良篇の次ぎは大和篇——そうして足跡を近畿に及ぼす考へである。▼小生が二月十九日から病臥したため、雜誌に、句會に迷惑をかけたので、まことに濟まないと思つてゐる。通信や、電話によつて督促らや、激勵やら、病臥と知れてお見舞やらを忝なくしたことは感謝の言葉を知らない。月餘が過ぎてもまだハツキリしないが、仕事だけは休まず續けてゐるので御安心を願ひたい。(路島生)

★★社關係の人々★★

主幹
麻生路郎

賛助員
池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　笠原路生　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　長岡半太郎　長野晴濱　藤村作　藤本卯之助　顎原退藏　淺田一　末弘巖太郎

客員
鳥山一歩　沖野岩三郎　大島濤明　大谷五花村　亀井晨修　川村花菱　米村あん馬　田村孝之介　谷脇素文　高尾亮雄　生方敏郎　窪田銀波樓　山本雨迷　安川久留美　前田五健　柴谷宰二郎　篠原春雨　姪子省二　藤里好古　森東魚

不朽洞會員
橋本綠雨　高橋かほる　福田山雨樓　西田卿樂　永田里十九　奥村丹路　岩崎柳路　増元翠陽　寺井鋭々　大西八歩　高澤一涙　戸田孤篷　小林橙舎　尾崎方正　石井白面人　川出美根子　中島生々庵　戸倉普天　小畑自由朗　古川風竹　前山北海　古川寛花麗　岩崎山石　藤井友郎　米本貴志子　内藤草一郎　三輪晩翠★　北山悟郎　水谷鮎美　姫田夕鐘　清水友帆　松井円坊　石野秀雄　清水史路　吉田水車　妹尾八九滿　須崎豆秋　春元紀太　西いわを　後藤青兒　宮岡白峰　石曾根民郎　中西おさむ　原史風　本水客　黒川紫香　西川愁水　植山九天　大坂形水　丸尾潮花　夷一笑

岩橋双虎　岡田某人　岩崎松代　田中雨月　平佐平三　橋本波夢遣　藤岡至藝瑠　岩崎柳路　増元翠陽　酒井斗風　北川春巣　布施筑川　小林橙舎　尾崎方正　佐竹香附子　押谷たけを　關根山彦　西尾桑　多田一波　櫻川不水　田中風葉　中原銑人　濱田久米雄　好崎申仙　杉原大研子　菊澤小松園　魚住滿潮　岩本雀踊子　下關支部(下關)牛休　北鮮支部(羅津府)美笑　蒙疆支部(張家口)柳路　上海支部(中華)天作　鐵道病院支部(大阪)春巣　渚支部(大阪)細泉　四ッ橋支部(大阪)翠芳　布哇支部(布哇)魔花麗　堺支部(堺)角堂　岡山支部(岡山)九坡　尼崎支部(尼崎)美知夫　日和佐支部(徳島縣)賢次　(雜川)早鐘會(大牟田)抱逸

支部と幹事

道頓堀支部(大阪)萬よし　函館支部(函館)晟修　梅田支部(大阪)鮎美　簸川支部(島根)綠之助　鳥取支部(鳥取)鐵州　松山支部(松山)赫堂　天王寺支部(大阪)八九滿　鶴町支部(大阪)双虎　御池橋支部(大阪)いわを　松江支部(松江)山川兒　大鐵局支部(大阪)水客　西條支部(愛媛)英賀夫　城南支部(大阪)申仙　今治支部(今治)文庫　(雜川)光笑會(大阪)里十九　竹原支部(廣島)芳郎　廣島支部(廣島)風來子　豊中支部(豊中)紫香　蒙疆支部(張家口)柳路　清水史路　玉井彩泡　鈴木九坡　逸見灯竿　石原伯峯　西川青美　植山九天　大森風來子　森宗男　後藤青兒　宮岡白峰　石曾根民郎　中西おさむ　原史風　本水客　黒川紫香　西川愁水　植山九天　大坂形水　丸尾潮花　夷一笑

募集

第十八卷 第六號課題
四月廿日締切
(十句以内)
代用食　福田山雨樓選
純綿　姫田夕鐘選

第十八卷 第七號課題
五月廿日締切
(十句以内)
古本　森東魚選
慰問袋　清水史路選

第十八卷 第八號課題
六月廿日締切
(十句以内)
雷　高橋かほる選
水泳　濱田久米雄選

毎號募集(毎月五日締切)
近作柳樽(雜吟廿句)　麻生路郎選
川柳塔　麻生路郎選
同舟近詠
各地柳壇(會報)
文章(評論研究感想吟行漫文漫畫)

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の原紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る
▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。
▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事
▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
▲書體はなるべく楷書(川柳雜誌原稿)と封筒に朱記の事
▲締切は厳守されたし。
▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

川柳雜誌 第十八卷 第四號
毎月一回一日發行

定價
一冊 ㊐ 金三〇錢(送料一錢)
半ヶ年・六冊 金一圓八十錢(特輯共)
一ヶ年・十二冊 金三圓六十錢(特輯共)
外國送本には海外郵送料實費の加算を乞ふ
御註文はすべて眞金で願ひます。振替(大阪七五〇五〇)又は小爲替を御利用願ひます。御註文は何月號よりと御指示願ひます。轉居又は改號等の節は舊新俳記の事

昭和十六年三月廿五日印刷
昭和十六年四月一日發行

禁無斷轉載　本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

廣告
本誌廣告に御用の節は川柳雜誌社廣告部へ御一報下さいますやう。

發行所 川柳雜誌社
大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地(昭和ビル)
振替(大阪七五〇五〇)
電話土佐堀 三三三三番 八八—六三四番
大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地
印刷人 麻生幸二郎

賣捌書店
(大阪)福音社　百貨店書籍部　明文堂　朝日ビル書店
其他市内各書店
(東京)東京堂　(神戸)米田寶文館　(函館)石塚
(京都)三宅(名古屋)靜觀堂

明朗な海邊に

豊富な陽光清澄な空氣惠まれた阪神パークは日本唯一を誇る綜合遊園でお子樣の樂しい遊び場であり、又手輕に行け、御家族連れの行樂地であります。更に、最近小學校、中等學校の野外教室として利用されて居ります。

珍らしい動物群

ペンギンの海、あしかの海、モンキーアパート、鵜の池、紅鶴園、水禽池山羊の峰、孔雀苑、鹿の杜、ワツトホッグガーデン、羊の牧場、駝鳥の家、カンガールハウス等、いろんな動物が棲息してゐる自然の狀態がそのまゝ見られる珍らしい動物園で、阪神パークが誇りとするものであります。

面白い動物サーカス

動物の中の藝達者が動物サーカスに出演して面白い曲藝をお目にかけます。チンパンヂーオペラ嬢、おうむの福ちやん、日本猿チビ君、山羊、あしか、小象等。

東洋一の水族館

收容魚介類の多種多樣と設備の完全とを以て東洋一と稱せられてゐるこの水族館は最近また日本で初めての試みであるとても美しいパノラマ式水槽を完成しました。この水族館では毎月、水族館の魚類採集船阪神丸を紀州、土佐、遠くは流球にまで派遣して常に魚類の補充に努力してゐます。

美しいお庭と愉快な乘物

ロックガーデンや芝生や植込みや砂遊び場等美しい廣いお庭はお子樣の樂しい遊び場であり、電氣自動車、バタフライ、子供汽車、飛行塔、小馬、其他の乘物やスポーツランドはいつもお子樣の人氣の焦點です。更に御家族打揃つて滿足して頂ける家庭映畫館や子供會館、御休息には食堂、喫茶室の設備があります。

ガラス壜代用
紙容器
金屬代用紙罐
紙コップ

丸形・角形・小判形・組立式各種・藥品・食料品・菓子等の容器として最適

大阪市住吉區晴明通一丁目四〇番地
二葉屋商店
電話事務所用 (天下茶屋 四一〇四番 / 代 四三〇二番)

大正十二年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）　昭和十六年三月廿五日印刷納本・昭和十六年四月一日發行

SENRYU ZASSHI

Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

りとびきに

美顔水

ニキビ

蚤・蚊・南京虫等の
毒虫でカユい時！

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

▼ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の藥です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧！　ゼヒお勸したい藥です！

▲定價一瓶四十五錢・六十五錢・一圓三十錢。
全國藥店にあり

ニキビ・吹出物に是非此藥

阪大・京東
桃谷順天館